

# 丘の公園第5遺跡

発掘調査報告書

1990. 3

山 梨 県 教 育 委 員 会  
山 梨 県 企 業 局

# 丘の公園第5遺跡

発掘調査報告書

1990. 3

山 梨 県 教 育 委 員 会  
山 梨 県 企 業 局

## 序

本書は、山梨県北巨摩郡高根町清里に所在する丘の公園第5遺跡の発掘調査報告書であります。

県企業局が計画した総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」のゴルフ場造成事業に先立ち、1988年に当センターが実施した発掘調査の結果をまとめたものであります。

この丘の公園地内は県有林となっていますが、それ以前は御料林であり、古来より開発の手が加わっていない土地であります。そのため遺跡が確認されておりましたが、当センターによる1983年度から1984年度の2次にわたる遺跡分布調査、1984年度、1986年度、1987年度と3次にわたる遺跡範囲確認調査で、先土器時代から中世にいたる8カ所の遺跡が発見されました。この結果は、開発と遺跡保存の調整に生かされ、大半の遺跡は保存されておりますが、やむなくゴルフコースにかかる部分については、詳細な発掘調査を実施して参りました。1987年度の丘の公園第2遺跡と今回報告します丘の公園第5遺跡がそれであります。

本遺跡では、縄文時代草創期の石槍にはじまり、縄文時代早期、前期、後期、弥生時代後期、古墳時代前期の土器や石器が見られます。また、縄文時代の陥し穴3基、古代以降の陥し穴5基が見られ、狩猟活動に当地が利用されていたことがわかります。このほか古代以降の炭焼き遺構1基も調査いたしました。特に日常生活に関連する遺構が見られませんが、遺物の分布から当地の地形の利用形態をかいま見ることができました。住居址のある集落遺跡の調査例は多いのですが、当遺跡のような居住形態も当時の人々の生活サイクルのなかで確固とした位置を占めていたことが確認できました。今後、こうした住居址を伴わない居住形態の遺跡の意識的な調査が望まれます。なお、本遺跡の調査に当たり、光波測距儀を平安博物館（現在の京都文化博物館）、古代学協会のご好意で借用することができました。また、帝京大学山梨文化財研究所には、地質調査をお願い致しました。上記の機関各位に深甚なる謝意を表する次第です。さらに、ご協力いただいた関係機関各位、並びに直接調査に当たられた皆様方に厚く御礼申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 磯貝 正義

## 例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡高根町清里に所在する丘の公園第5遺跡の発掘調査報告書である。  
なお、本遺跡調査時に発見した丘の公園第6遺跡の範囲確認調査と、並行して発掘調査した溝についても本書に記載した。
2. 本調査は、総合スポーツレクリエーション施設「丘の公園」のゴルフ場造成に伴うもので、山梨県企業局の委託を受け、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査および出土品の整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。
4. 本書の執筆は、付編3を河西学氏（帝京大学山梨文化財研究所）が行い、他は保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）が行った。編集作業は保坂が担当した。
5. 整理作業参加者は、下記のとおりである。  
石川操、弦間千鶴、内藤真千子、松野和美、柏木松江、遠藤映子、和田宏美、石田文次郎、保坂典子
6. 丘の公園第5遺跡発掘調査では、遺物・遺構の実測および図化作業を、光波測距儀とパーソナルコンピューターを用いて行ったが、これは、平安博物館（現在の京都文化博物館）と（財）古代学協会がコンピュータ・システム<sup>（株）</sup>と共同開発した遺跡トータルシステム「サイト」を借用した。  
また、地質調査を帝京大学山梨文化財研究所に依頼した。
7. 発掘調査から報告書作成に至る過程で、次の方々より御助言、御協力をいただいた。衷心より御礼申し上げる次第である。（敬称略）  
相原和仁、雨宮正樹、石川吉郎、鈴木忠司、谷口彰男、利根川欣一、西井 晃、早川健夫、南 博司、山下秀樹

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯	1	第2節 炭焼き遺構	22
第2章 発掘調査の組織	2	第3節 遺物	22
第3章 調査の方法と経過	2	第9章 遺物の分布状況	22
第4章 遺跡の位置と立地	3	第10章 結語	23
第5章 縄文時代の遺構と遺物		付編1 丘の公園第6遺跡範囲確認調査	
第1節 陥し穴	3	1. 調査の経緯	26
第2節 土器	5	4. 土層	27
第3節 石器	13	2. 調査の方法	26
第6章 弥生時代の遺物		5. 出土遺物	27
第1節 土器	16	3. 遺跡の立地	26
第7章 古墳時代の遺物		6. 小結	30
第1節 土器	16	付編2 溝の調査	
第8章 古代以降の遺構と遺物		1. 調査の経緯	32
第1節 陥し穴	16	2. 調査の成果	32
		付編3 丘の公園第5遺跡・第6遺跡のテフラ	
		1. はじめに	33
		3. 分析結果	33
		2. 試料および分析法	33
		4. 考察	40
		丘の公園第5遺跡調査概要	

# 挿 図 目 次

第1図 丘の公園第5遺跡発掘区設定 状況および周辺の地形	1	第20図 遺物出土状況全体図	17
第2図 丘の公園遺跡群位置図	2	第21図 A地区遺物平面分布図	18
第3図 A型5号陥し穴	4	第22図 A地区遺物垂直分布図(1)	18
第4図 A型8号陥し穴	4	第23図 A地区遺物垂直分布図(2)	18
第5図 A型11号陥し穴	4	第24図 B地区遺物平面分布図	19
第6図 丘の公園第5遺跡出土土器(1)	5	第25図 B地区遺物垂直分布図	19
第7図 丘の公園第5遺跡出土土器(2)	6	第26図 C地区遺物平面分布図	20
第8図 縄文時代の石器(1)	7	第27図 C地区遺物垂直分布図(1)	20
第9図 縄文時代の石器(2)	8	第28図 C地区遺物垂直分布図(2)	21
第10図 縄文時代の石器(3)	9	第29図 D地区遺物平面分布図	21
第11図 縄文時代の石器(4)	10	第30図 D地区遺物垂直分布図	21
第12図 B型6号陥し穴	11	第31図 E地区遺物平面分布図	21
第13図 B型7号陥し穴	11	第32図 E地区遺物垂直分布図	22
第14図 B型9号陥し穴	12	第33図 陥し穴の分布	24
第15図 B型11号陥し穴	12	第34図 陥し穴の主軸方向	24
第16図 B型13号陥し穴	13	第35図 丘の公園第6遺跡周辺の地形	26
第17図 B型陥し穴掘削工具痕のモデ リング陽像実測図と刃先の形態	14	第36図 丘の公園第6遺跡の範囲と試掘 坑の配置図	27
第18図 C2号炭焼き遺構	15	第37図 土層断面図と土壌サンプル採取 位置	27
第19図 古代以降の遺物	15	第38図 丘の公園第6遺跡出土石器(1)	28

第39図	丘の公園第 6 遺跡出土石器(2)……29	第42図	丘の公園第 6 遺跡試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成……38
第40図	溝位置図、溝全体図、溝土層断面図……32	第43図	丘の公園第 6 遺跡東地点試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成……39
第41図	丘の公園第 5 遺跡試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成……36	第44図	丘の公園第 6 遺跡東地点の A T ……40

## 表 目 次

第 1 表	丘の公園第 5 ・ 第 6 遺跡試料の計測粒数……34	第 3 表	屈折率測定値……37
第 2 表	丘の公園第 6 遺跡東地点試料の計測粒数……34		

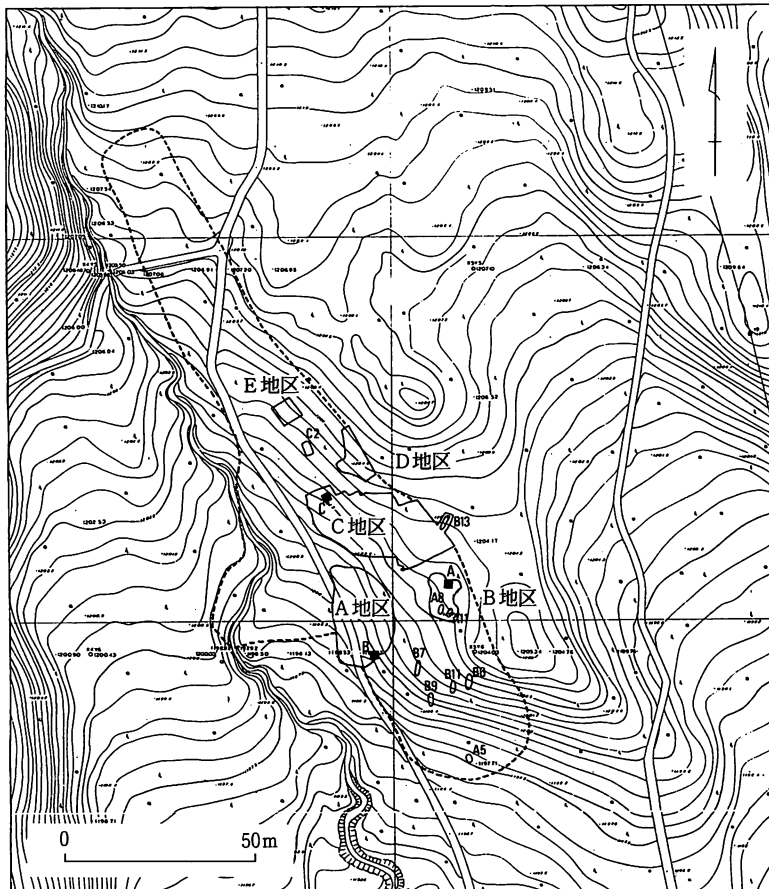
## 図 版 目 次

図版 1	丘の公園第 5 遺跡 A ・ B ・ C 地区近影、丘の公園第 5 遺跡 A ・ C 地区近影、A 型 5 号陥し穴、A 型 8 号陥し穴、A 型 11 号陥し穴
図版 2	B 型 6 号陥し穴、B 型 7 号陥し穴、B 型 9 号陥し穴、B 型 11 号陥し穴、B 型 13 号陥し穴、C 2 号炭焼き遺構
図版 3	B 型 7 号陥し穴北側掘削工具痕、B 型 7 号陥し穴北側掘削工具痕のモデリング陽像、B 型 11 号陥し穴掘削工具痕のモデリング陽像、C 地区縄文時代前期土器出土状況、A 地区弥生時代後期土器出土状況、A 地区縄文時代後期土器出土状況
図版 4	縄文時代草創期石槍出土状況、縄文時代草創期石槍、縄文時代早期鶉ヶ島台式土器、縄文時代早期押型文土器、縄文時代前期十三菩提式土器、縄文時代前期鍋屋町系土器、縄文時代後期堀之内式注口土器
図版 5	縄文時代後期堀之内式土器、弥生時代後期壺形土器、古墳時代前期高坏、縄文時代石器、丘の公園第 6 遺跡出土槍先形尖頭器、丘の公園第 6 遺跡試掘坑設定状況、丘の公園第 6 遺跡西側断面、丘の公園第 6 遺跡出土状況
図版 6	溝南半部、溝北半部、溝覆土断面、丘の公園第 6 遺跡土壌サンプル採取状況、丘の公園第 5 遺跡 B 地点土壌サンプル採取状況、丘の公園第 5 遺跡 C 地点土壌サンプル採取状況、丘 6 東地点 A T 純層調査坑、丘 6 東地点 A T 純層

# 第1章 発掘調査に至る経緯

丘の公園第5遺跡は、山梨県企業局が進めるゴルフ場を中心とする総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」の開発に伴い発見された遺跡である。山梨県教育委員会は、その工事に先立ち、1983年度と1984年度の2次にわたり、文化庁の補助を得て、この地域の遺跡分布調査を行った<sup>1)</sup>。130haの予定地域に合計514カ所の試掘坑を設定して、先土器時代から縄文時代の13カ所の遺跡を発見した。その後、開発計画との調整のため、1984年度<sup>2)</sup>、1986年度<sup>3)</sup>、1987年度<sup>4)</sup>の3次にわたり、合計1578カ所の試掘坑により、6カ所の遺跡の範囲確認調査を実施した。その結果をもとに開発計画との調整作業を行い、工事地域と重複が避けられない丘の公園第2遺跡<sup>5)</sup>の一部と今回報告する丘の公園第5遺跡の一部について、発掘調査を行うこととなった。

丘の公園第5遺跡は、1984年度の分布調査で確認され、1987年度に範囲確認調査を行った。南北約300m、東西約100m、面積約25,000㎡におよぶ広大な遺跡である。南北に伸びる痩せ尾根状の高地上に展開する遺跡で、縄文時代から中世に至る土器や石器、陥し穴などが発見され



第1図 丘の公園第5遺跡発掘区設定状況および周辺の地形（1/2000）  
〔黒四角のA, B, Cは土壌サンプル採取地点とその番号。〕  
破線はゴルフコースの範囲。

た。こうした遺物・遺構は、遺跡内で地点的な分布を示し、いくつかの違った時代、利用形態の遺跡が複合していることがわかる。

本調査を行った地域は、遺跡の北西部にあたる。ゴルフコースにかかる遺構および遺物分布地点5カ所の合計1100㎡を調査した（第1図）。

また、遺跡の北方の同じ尾根筋上に、長さ約300mにわたって尾根筋を東西に横切る溝が、1984年度の分布調査の折、地上観察で見出されていた。この溝の西半

分がゴルフコースにかかるため、この発掘調査も合わせて行った（付編2）。

溝の調査の過程で、先土器時代の槍先形尖頭器を出土する地点を発見した。急遽、県企業局と協議したところ、その地点については、範囲確認調査を行い、50cm程度の埋土で現状保存することとなった。この地点については、丘の公園第6遺跡と呼称することとする（付編1）。

## 第2章 発掘調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会

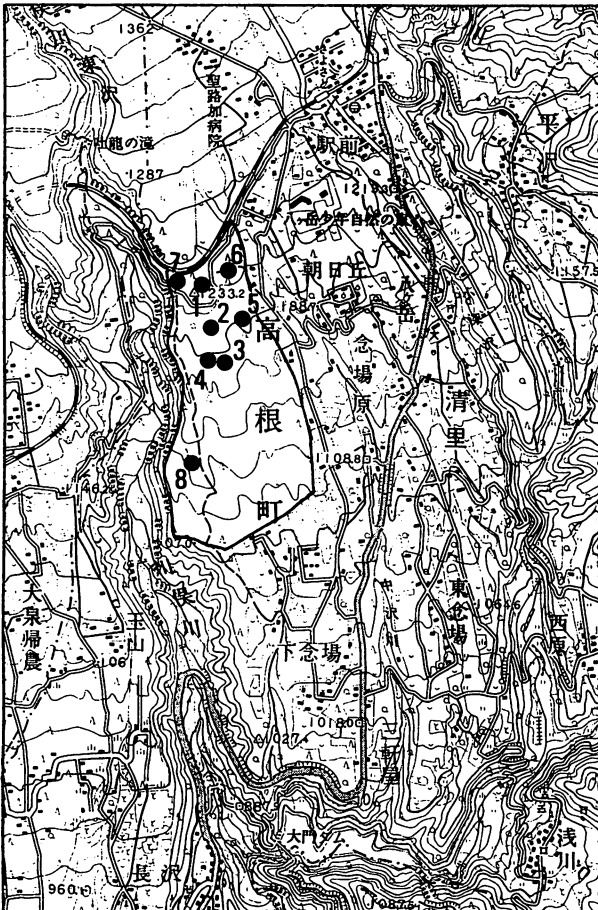
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 保坂康夫、高野玄明

調査参加者 斉藤登美夫、津金節三、小林達男、利根川喜代子、前田好子、山岡栄子、重川

八千子、重川恵美子、堀川ふじ、宮井徹行、菅原夏子、藤井宏、高橋信夫、小沢みよ子、津金はるえ、山岡喜美枝、津金孝義、利根川慶一、八巻久子、八巻栄。

協力機関 高根町教育委員会



第2図 丘の公園遺跡群位置図（1/50000）

1. 丘の公園第1遺跡 2. 丘の公園第2遺跡 3. 丘の公園第3遺跡 4. 丘の公園第4遺跡 5. 丘の公園第5遺跡 6. 丘の公園第6遺跡 7. 丘の公園第7遺跡 8. 丘の公園14番ホール遺跡 実線の範囲が丘の公園

## 第3章 調査の方法と経過

1987年度に範囲確認がなされた5カ所の地点について、その遺物分布範囲を全面的に掘り下げた（第1図A～E地区）。表土より人力で掘り下げを行った。腐植層をジョレンで除去し、それ以下を手ガンナで掘り下げた。黒色土層より下位は、P m I（御岳第1軽石）より下位のローム層や火山灰層が露出し、黒色土層直下に不整合な面の存在が知られた。したがって、調査もこの面まで行った。

遺構は、1987年度の調査の折に発見された6基の陥し穴と1基の炭焼き遺構を対象とした。なお、調査途上でさらに2基の陥し穴を発見し、調査した。

遺物の位置の記録や遺構の実測は、



全て光波測距儀と小型コンピューターを用いて行った。京都の古代学協会、平安博物館（現在の京都文化博物館）とコンピューター・システム㈱が共同開発した遺跡調査トータルシステム「サイト」を、両者の御好意により借用して行った。使用機器は、ジオメーター（光波測距儀）、エプソンHC45（小型コンピューター）、PC9801VX（ホストコンピューター）、ローランドプロッター（作画機）である。

調査は、1988年5月16日から同年9月21日にかけて行った。

## 第4章 遺跡の位置と立地

丘の公園は、山梨県の北西部、八ヶ岳南東麓のいわゆる念場原の台地上に位置する。丘の公園内の遺跡（丘の公園遺跡群）は、その地域の北部に偏在するありかたを示す（第2図）。

丘の公園第1遺跡は、14000㎡にもおよぶ先土器時代の大遺跡で、縄文時代の遺物・遺構も見出だされている。丘の公園第2遺跡は、2000㎡ほどの先土器時代遺跡で、縄文時代の陥し穴もみられる。丘の公園第4遺跡は先土器時代らしい剥片が、丘の公園第5遺跡は縄文時代と思われる焼土が、丘の公園第7遺跡は古代以降と思われる炭焼き遺構が見出だされているが、いずれも小規模である。丘の公園14番ホール遺跡は先土器時代最末期と思われる槍先形尖頭器文化の遺跡である。直径30mほどの規模を持つ。一方、丘の公園第5遺跡は縄文時代草創期から中世頃にかけての遺跡であり、先土器時代遺物を欠く。丘の公園第6遺跡は槍先形尖頭器文化の遺跡で、丘の公園14番ホール遺跡との関連性が考えられる。

先土器時代が中心となる丘の公園第1・第2・14番ホール遺跡と、縄文時代以降の丘の公園第5遺跡とは、立地に大きな違いが見取れる。前者は、Pm-I以前のローム層から連続的にローム層が厚く堆積している高平坦地上に立地する。特に丘の公園第1・第2遺跡は、地滑りによって形成された非常に平坦な面を広く占地している。一方、後者は、全体がかなり削り取られ、古いローム層や火山灰層などが露出した上に黒色土層が乗る瘦せ尾根状の地形の上面や傾斜面を占地している。両者の占地の違いは、時代による占地条件の違いを示すものと理解できる。

## 第5章 縄文時代の遺構と遺物

### 第1節 陥し穴

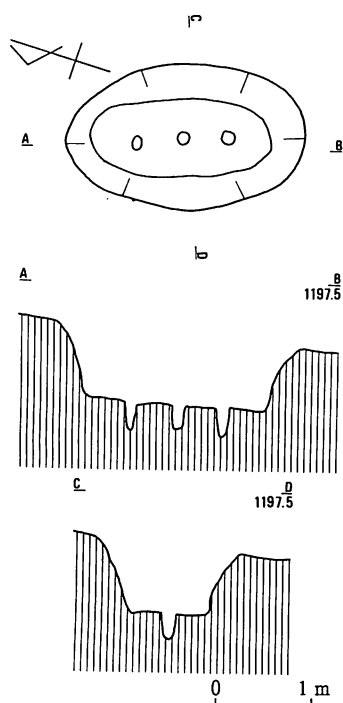
縄文時代と思われる陥し穴は3基調査した。1987年度範囲確認調査で発見されたもの2基（A型5号・8号陥し穴）と今回確認された1基（A型11号陥し穴）である。なお、A型陥し穴とは、「長さ2m、幅1m程度の楕円形の平面プランを主体とし、深さ1m程度の浅いもので、底面が平坦で広い<sup>6)</sup>」陥し穴である。そして、次の点から縄文時代のもものと判断している。

A型陥し穴の覆土は、黒褐色土が充填し、底部付近に軟質ローム層がみられる場合がある。本地域の標準的な土層は、黒色土層が上下に分層でき、上位に漆黒色土層、下位に黒褐色土層

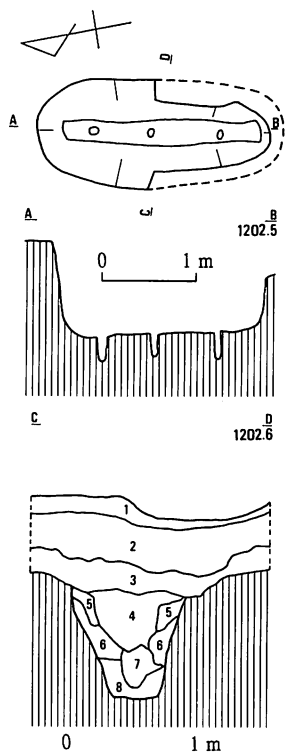
がある。また、ローム層などとの境界に暗褐色の漸移層がみられる。陥し穴の上方には、漆黒色土層と黒褐色土層とが整層的にみられ、掘り込み面は漸移層上面付近にあるものと見受けられる。黒色土層下半分の黒褐色土層は、本遺跡の調査成果などからして、縄文時代草創期以降、同中期以前の遺物を包含している。したがって、A型陥し穴は、縄文時代でも早い時期の所産である可能性が考える。なお、A型陥し穴内より出土した遺物は皆無である。

**A型5号陥し穴（第3図）** 調査地域の南端部に位置する。痩せ尾根西側傾斜面の下部、谷底平坦面との接線付近にある。長軸252cm、短軸152cm、確認面よりの深さ80cmである。長楕円の形態で、底面は平坦である。底面に長軸に沿って3個の穴が等間隔に直列する。その径は、12～15cm、深さは32cmから24cmである。壁は外傾するものの、底部に行くにしたがい直立ぎみとなる。覆土は、1987年度調査の折の断面図をみると、底部にロームブロック層がみられ、肩部が崩壊し、陥し穴内に落ち込んだ可能性がある。

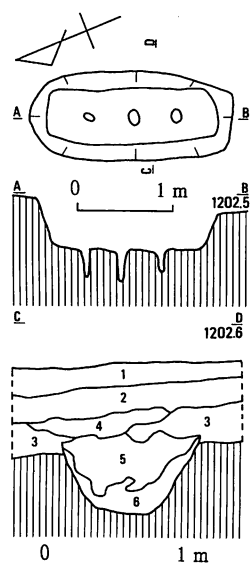
**A型8号陥し穴（第4図）** B地区南側に位置する。尾根状の平坦面の西側肩部にあたる。長楕円であるが、底面は狭長で両端部が角張る。長軸220cm、短軸116cm、深さ100cmである。底面幅が50cm弱と狭いが、平坦である。径10cm弱ほどの穴が長軸に沿って直列に配列する。その深さは30cm弱である。土層は、1層腐植層、2層漆黒色土層、3層黒褐色土層、4層黒色土層、5層暗褐色粘質土層、6層ロームブロック、7層暗褐色土層（ロームブロックを多く含み軟質）、8層暗褐色土層（ロームブロックを多く含み、粘性が強く軟質で7層より明るい）。4層以下



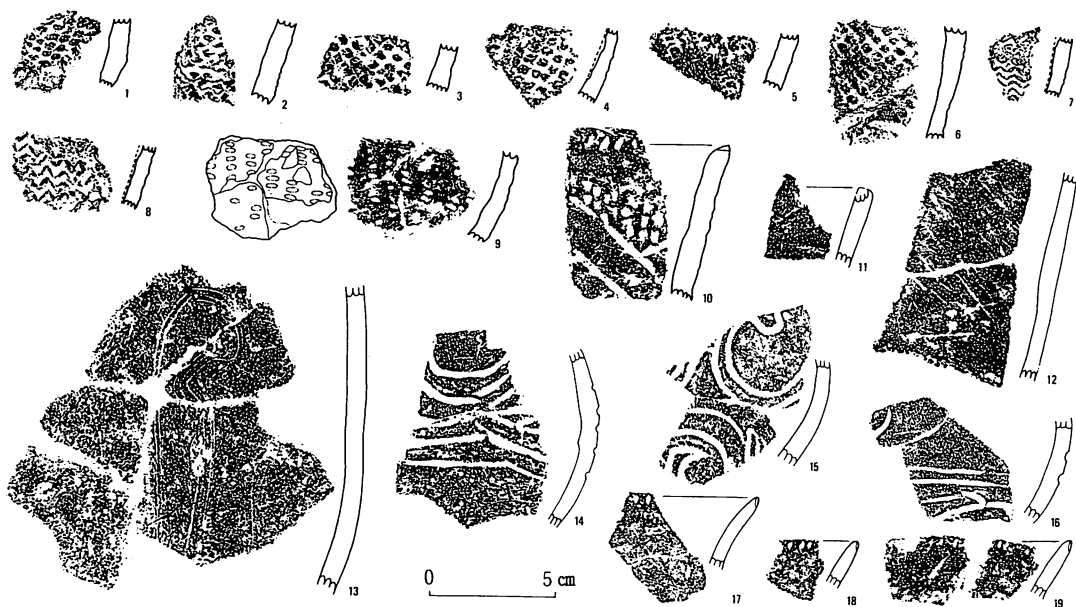
第3図 A型5号陥し穴



第4図 A型8号陥し穴



第5図 A型11号陥し穴



第6図 丘の公園第5遺跡出土土器(1) (1/3)

が覆土である。

A型11号陥し穴(第5図) A型8号陥し穴の北側に隣接していた。長楕円ではあるが、上面、底面ともに両端が角張っている。長軸212cm、短軸92cm、深さ56cmである。径16~12cmの穴が直列する。深さ32~24cm。土層は、1層腐植層、2層漆黒色土層、3層黒褐色土層、4層褐色土層、5層黒色土層、6層暗褐色土層(ロームブロックを多く含み、粘性強く、軟質)。5・6層が覆土であり、3層中位から掘り込んでいる様子が明瞭である。また、4層は、谷底平地と高地の境界部などにみられる黄色帯に似る。黄色帯形成時に、この陥し穴は埋没過程にあり、窪みとして存在していたと思われる。

## 第2節 土器

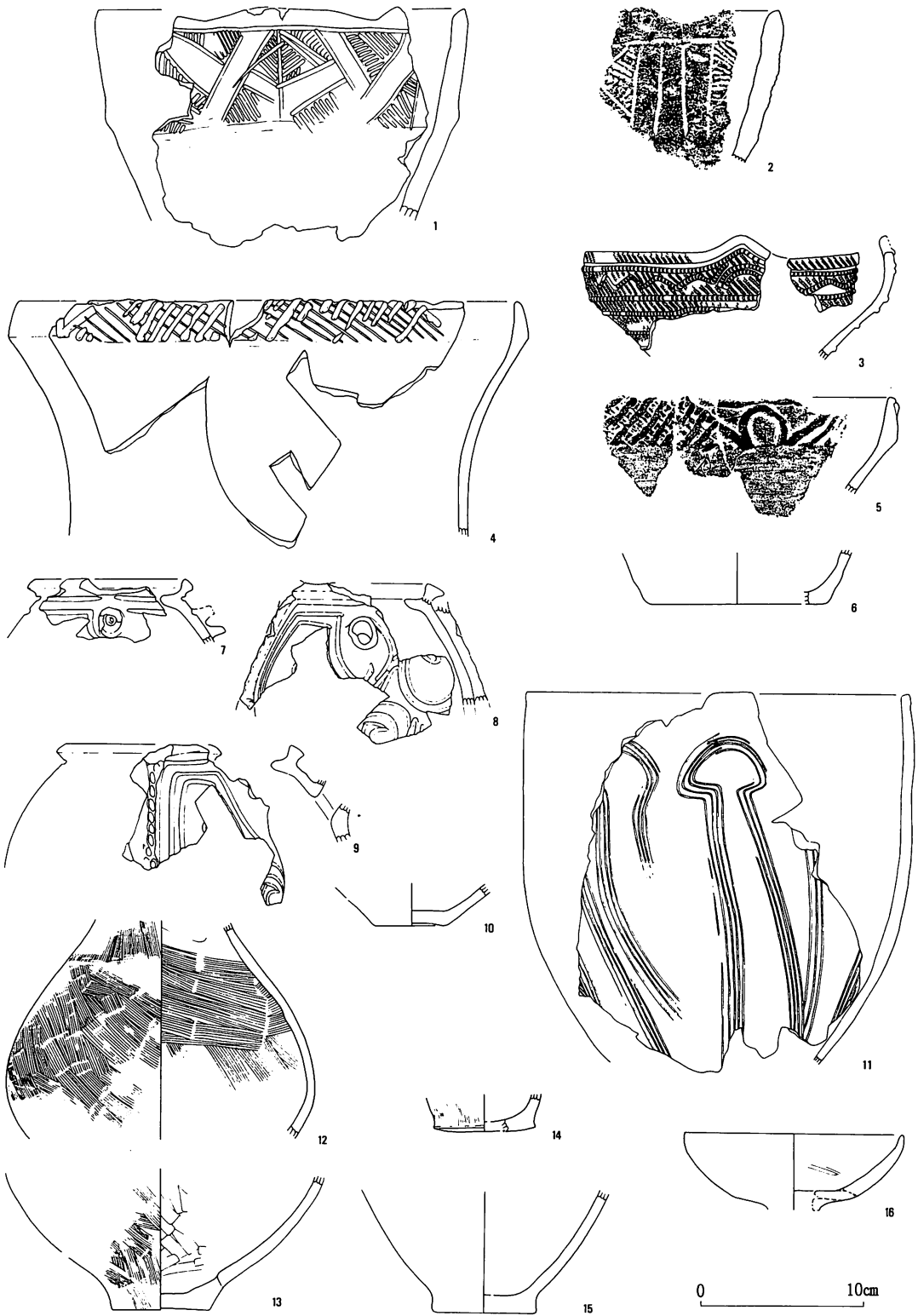
本遺跡の縄文時代の土器は、早期、前期、後期のもので土器片が合計257点である。大きく5群に分類し記載したい。

第I群 縄文時代早期前葉の押型文土器である。9点ある。これらは、さらに3類に分類できる。

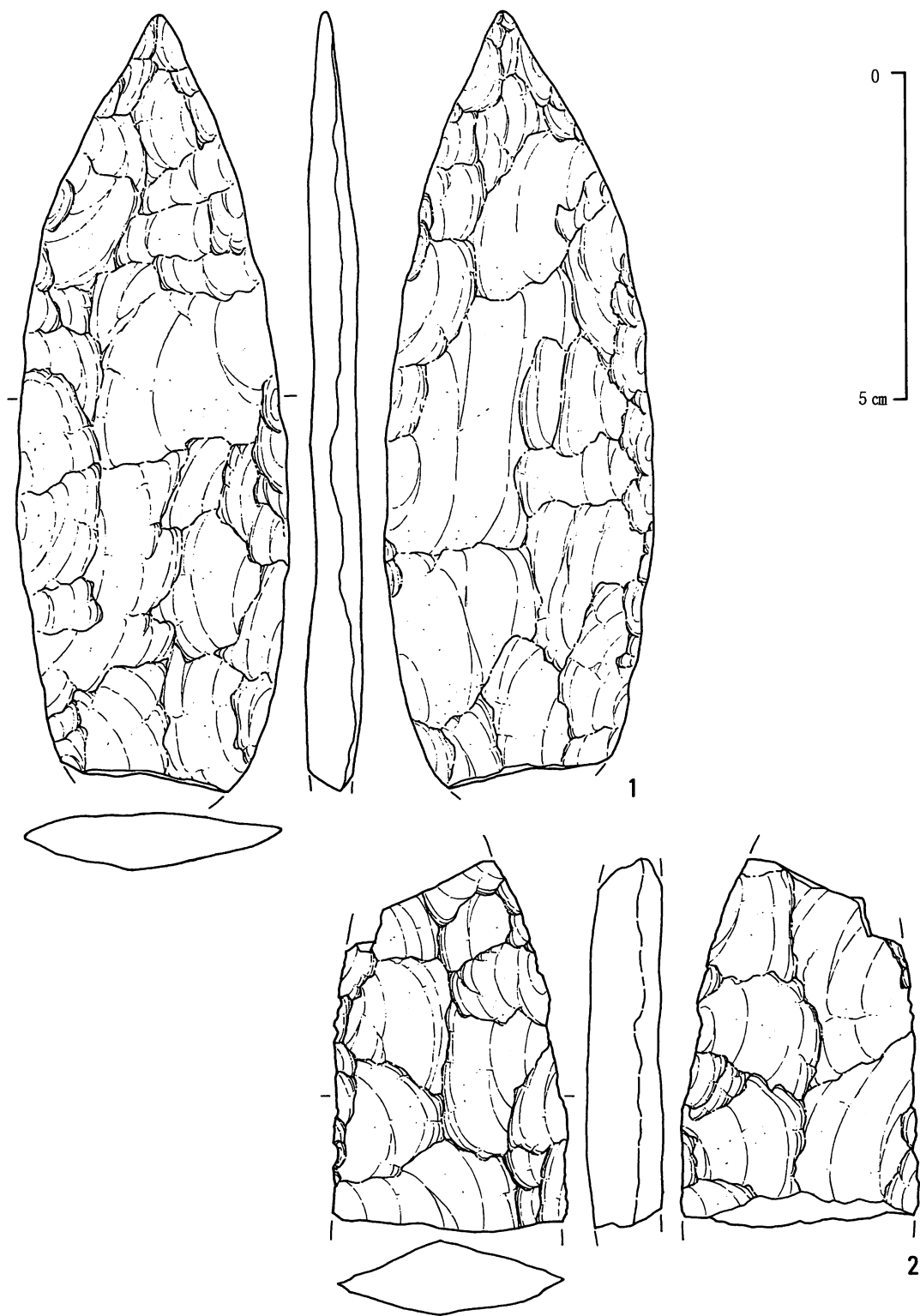
1類 楕円のポジティブな押型文のみが施文されたもので、5点ある(第6図1~5)。楕円の大きさは、いずれも4~5mmと小さい。また、非常に密である。2には、原体端部の押圧痕が残存しているが、原体端部が斜めに切断されていたらしく波状をなす。また、横方向に施文されたらしい。

2類 楕円押型文と沈線文が施文されたもので、1点ある(第6図6)。沈線は、幅4mm、長さ14mmにわたってみられるが、横方向に、断続的に施文されていると思われる。また、無文帯中に施文されたのではなく、押型文の上に施文されている。

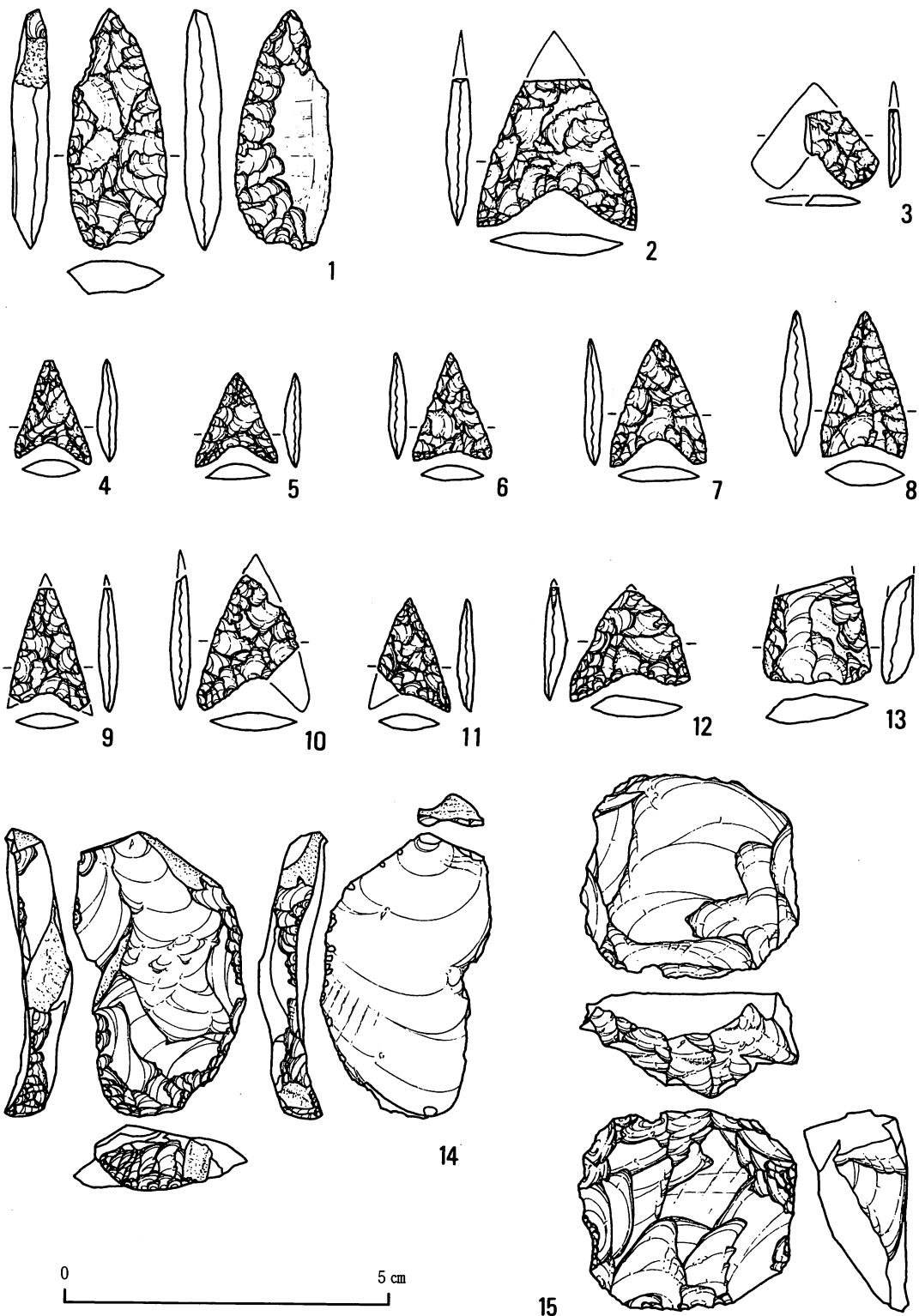
3類 山形押型文で、2点ある(第6図7・8)。7は、原体の端部がみられ、2同様波状をなす。



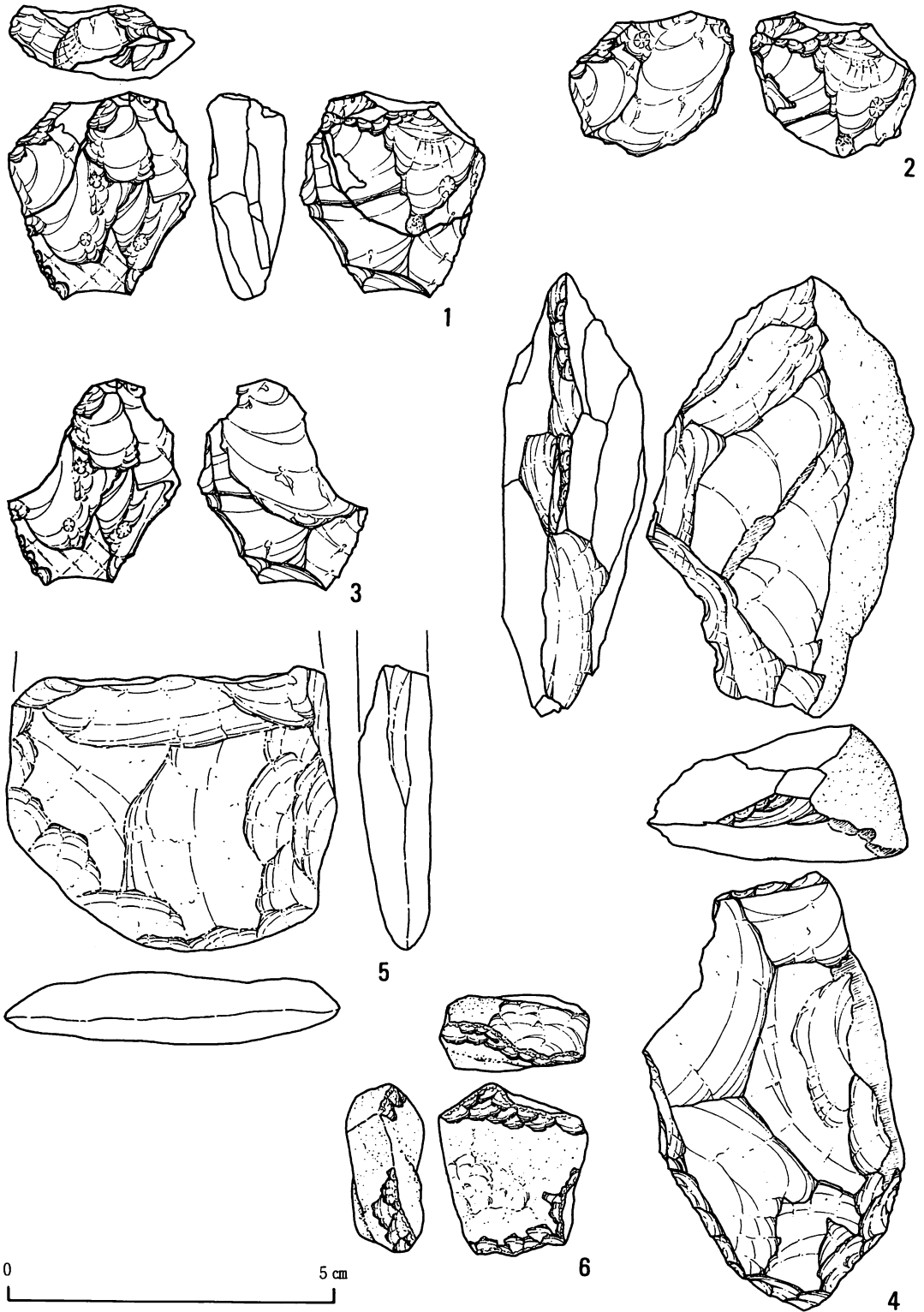
第7図 丘の公園第5遺跡出土土器(2) (1/4)



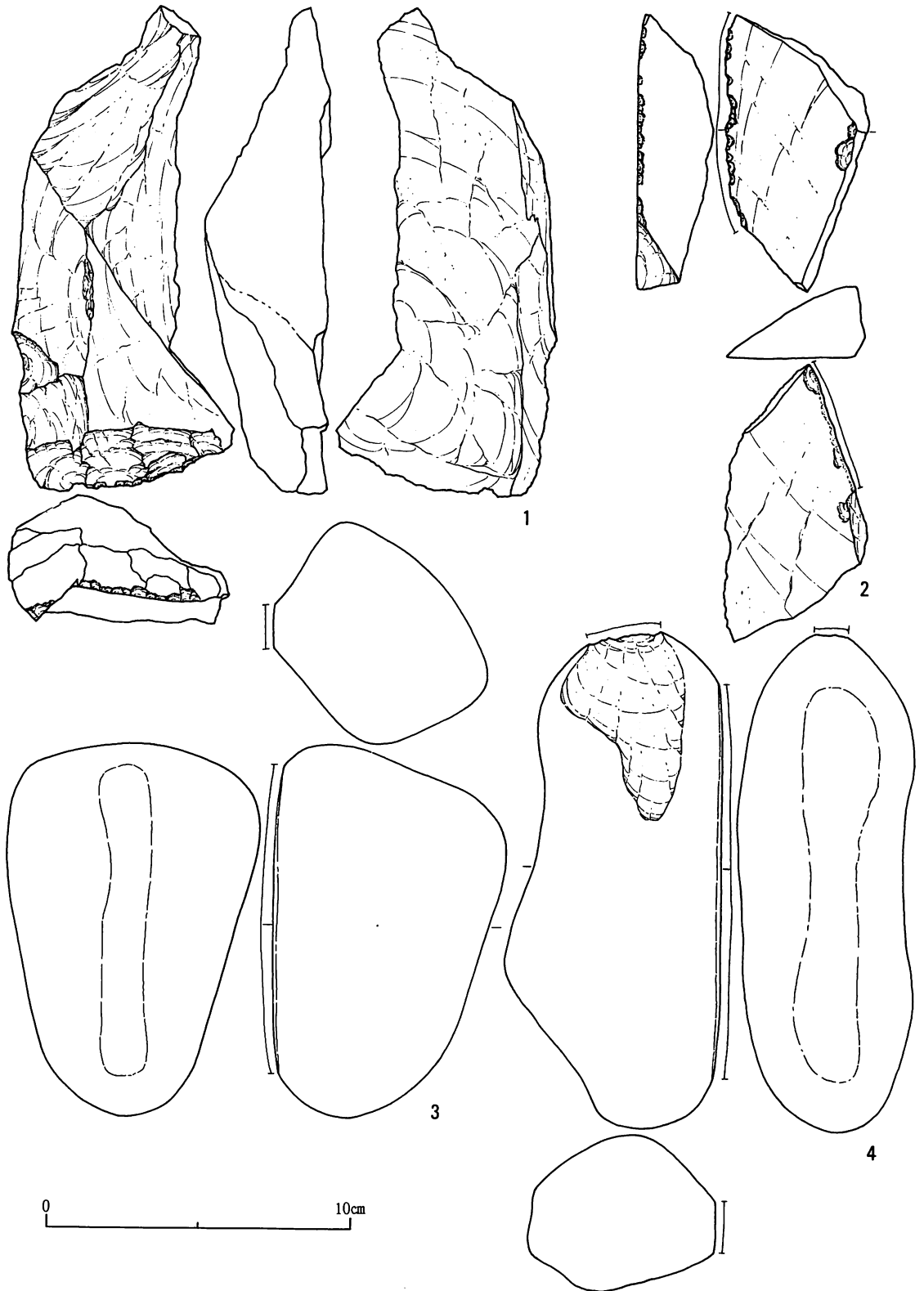
第8図 縄文時代の石器(1) (石槍 ; 1 / 1)



第9図 縄文時代の石器(2) (石鏃, 二次加工ある剥片, 亀甲形石器; 1/1)



第10図 縄文時代の石器(3) (石核, 打製石斧, 打痕ある礫, 礫器 ; 1 / 1)



第11図 縄文時代の石器(4) (礫器, 堆積岩系石材大型剥片, 敲石・磨石類; 1 / 2)

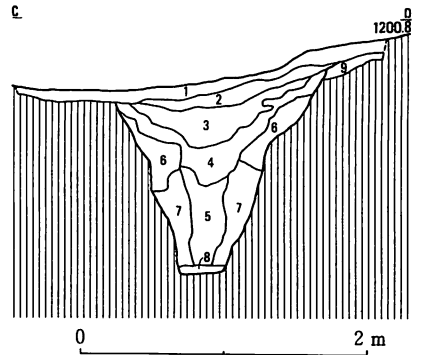
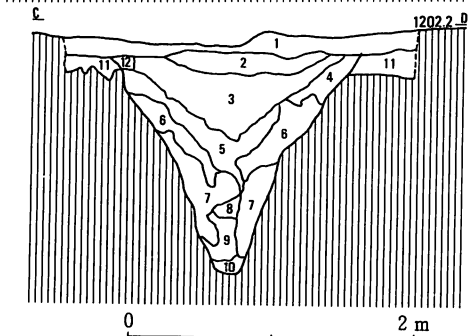
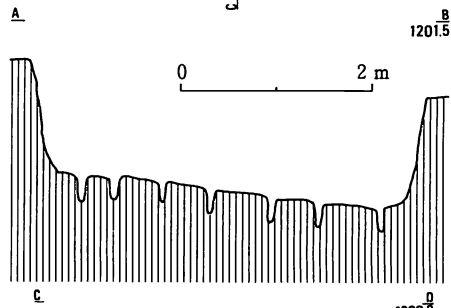
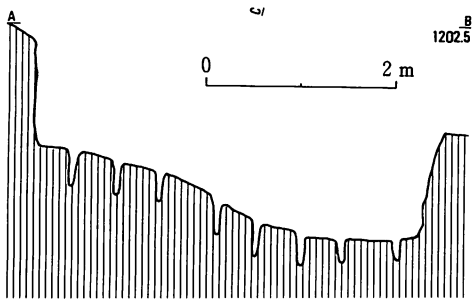
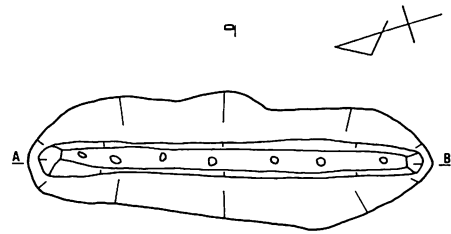
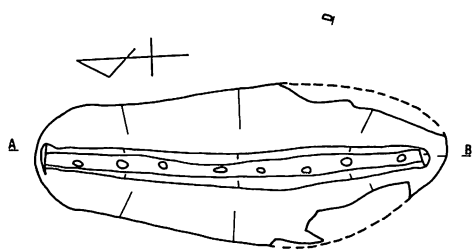


胎土は、1・7が金色の雲母を多量に含み、他の粒子が目立たないのに対し、他は雲母がほとんどみられず、石英、長石、輝石や大型の岩片が目立つ。色調は、黄褐色から赤褐色である。

第Ⅱ群 縄文時代早期後半、条痕文系の土器である。18点ある。これらは3類に分けられる。

1類 口縁直下に、沈線によって袈裟懸け状の幾何学文が施文され、三角形の区画内に刺突文が充填される。口縁は波状をなすらしい。口縁端部に刻みがみられる（第6図10）。1点のみである。この土器片の胎土は、石英、長石が少量みられ、特に輝石が目立つ。また、繊維の混入がみられる。表面が赤褐色、裏面が黒褐色を呈する。

2類 口縁直下に、沈線による袈裟懸け状の幾何学文によって文様帯が施文される。文様帯内の三角形の区画内には沈線が充填される点、1類と相異なる。文様帯直下に、断面三角の低い隆帯がめぐり、ゆるい高まりを示す。器形は、その隆帯部分から内側へゆるく屈曲する。それ以下の部分は、多方向のナデがみられる。内面は、横方向の指頭によるナデがみられる。口縁部は波状で、端部は尖る部分、平坦面が内傾する部分、断面コの字状に平坦な部分がある（第7図1・2）。胎土に岩片が多くみられ、チャートが含まれる。繊維も含む。1・2は接合し、合計11点で1個体を構成する。内外面とも黄褐色で、黒色の焼きむらが広範囲にみられる。



第12図 B型6号陥し穴

第13図 B型7号陥し穴

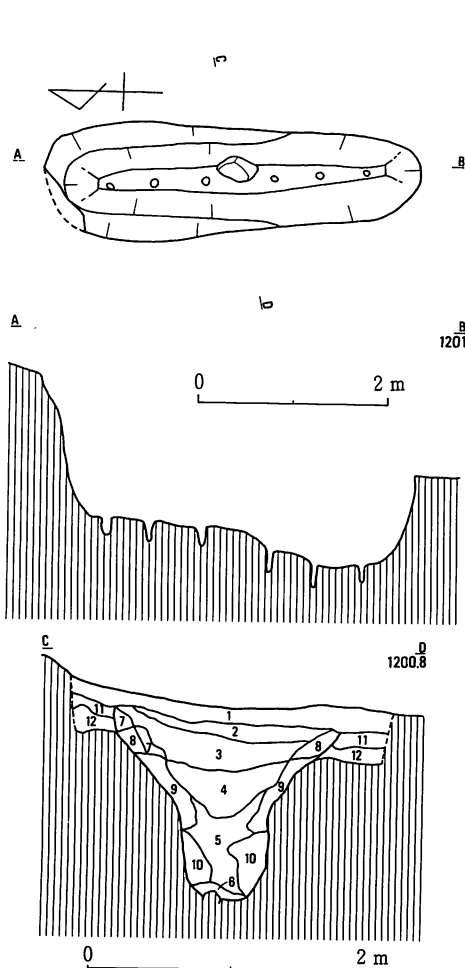
3類 外面に斜方向の擦痕がみられるもので、口縁が平坦である(第6図11・12)。繊維を含む。

第Ⅱ群土器1・2類は、文様のあり方などから条痕文系前半期の鶴ヶ島台式に比定できる。第Ⅲ群 絡条体圧痕文を有する土器である(第6図9)。1点のみである。施文密度が非常に粗である。また、縦方向に施文されている。底部付近の破片と思われる。内面には、黒色タール状の付着物が全面にみられる。胎土や色調が第Ⅱ群2類土器に似る。繊維の混入は不明。

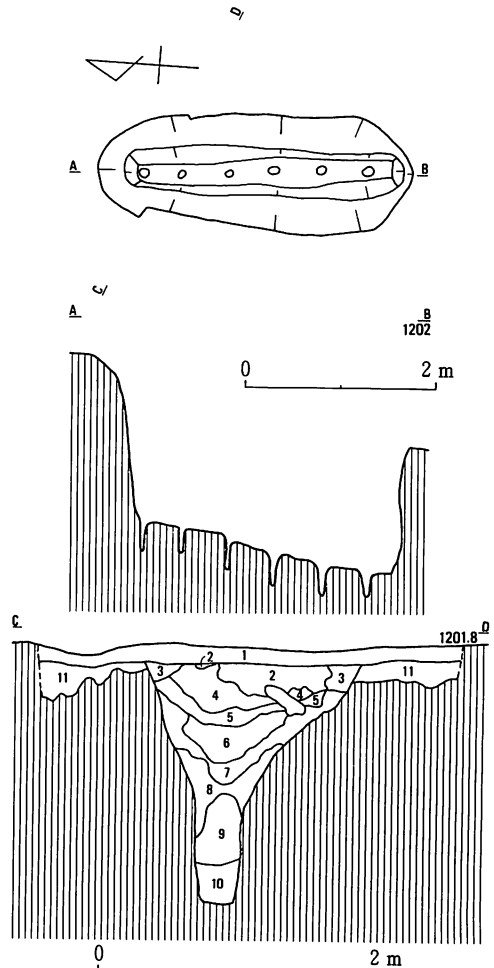
絡条体圧痕文は、縄文時代草創期の多縄文系土器や早期の撚系文系土器、条痕文系土器などにみられる。施文密度が粗である点や胎土から、条痕文系の土器と供伴を考えたい。しかし底部付近まで施文されるあり方など古い要素とも考えられ、他の時期の可能性も捨てきれない。

第Ⅳ群 縄文時代前期末葉の土器である。合計155点ある。2類に分類できる。

1類 器形は、キャリパー形で、大きく開いた胴上半部が、口縁部付近で内湾するものである。文様は、縄文地文の上に、細い粘土紐を横方向に貼付し、その上を半截竹管によって押引施文する。口縁直下に鋸歯状の貼付文と、その一端に2〜3本の貼付文で半円状のモチーフを構成するものとみられる。口縁は平縁であるが、部分的に三角状の突起がみられる。口縁部外面



第14図 B型9号陥し穴



第15図 B型11号陥し穴

に平板な粘土紐が貼付され、その上に縄文が施文されている。口縁端部は平坦でコの字形である。器壁は薄く、4～5mmである。胎土に、石英、長石、雲母の細かな粒子を含む。色調は赤褐色。第7図3の1個体で、15点が接合している。

2類 器形は、器体上部が大きく開き、口縁部がくの字に内傾する（第7図4・5）。胴部は、ほぼ垂直であるが、底部はすぼまるらしい（第7図6）。内傾した口縁部のみ文様がみられる。粘土紐により三角状の区画を作りその中に逆U字状の貼付文を入れる。このモチーフは、4単位程度施されると思われる。その後、右下がりの細い沈線文と、その上に左下がりの細い粘土紐を貼付し、格子状の文様を施す。同部は横方向に粗くナデられている。口縁は平縁で、端部は尖る。胎土に石英、長石の他、多量の岩片が入る。黄褐色を呈す。1個体のみで、140点で構成される。

第IV群1類は、典型的な十三菩提式である。一方、2類は北陸の鍋屋町式との関連が考えられよう。

第V群 縄文時代後期前半の土器である。合計74点ある。2類に分類できる。

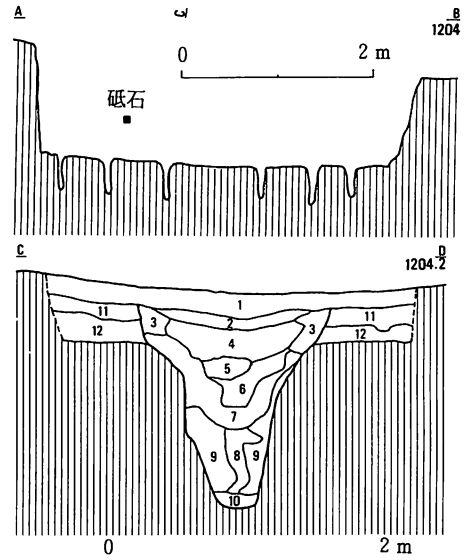
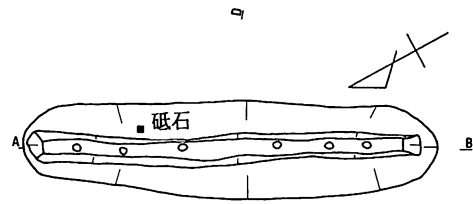
1類 注口土器である（第6図14～16、第7図7～10、全て同一個体）。器形は、下ぶくれ状ないしはそろばん玉状。口縁内側に受け部状の突出部が一周する。注口とその反対側に小突起が付く。両者とも、口縁部付近を含めて欠損しているため、把手等の存在は不明。刻みのある隆線が2本平行して縦に施文されていたらしい。これは、左右両面に施文されたらしい。他の部分は、沈線による文様がみられる。21点ある。

2類 同部中央に最大径があり、同部上半が直立するかやや内湾ぎみである深鉢（第7図11）。櫛歯状工具により、うっすらと男根状の文様が施文されているが、同一個体の破片の中に蕨手文もみられる（第6図13）。53点ある。

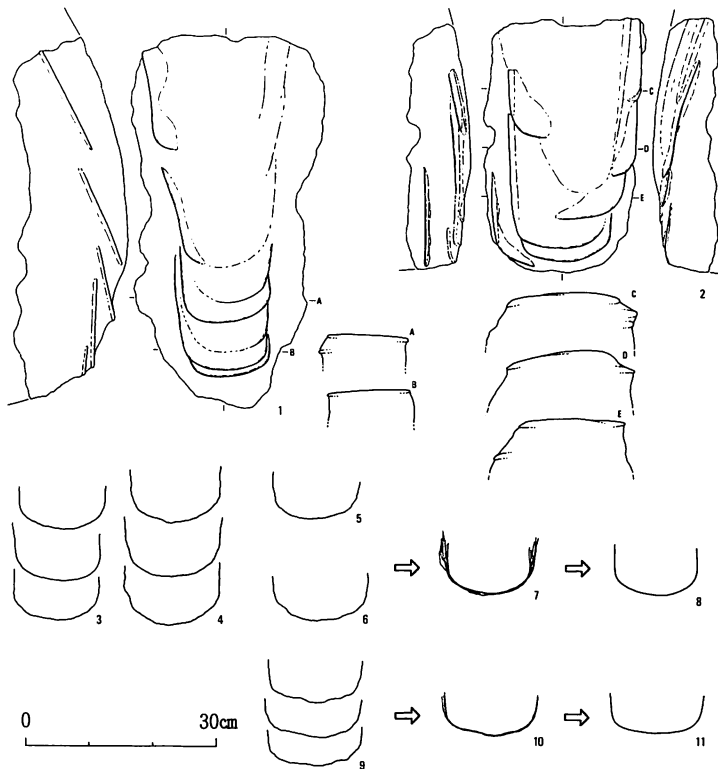
第V群土器は、器形や文様から堀之内式と考えられる

### 第3節 石器

縄文時代の石器として、石槍2点、石鏃20点、二次加工ある剥片12点、打製石斧1点、礫器2点、敲石・磨石類2点、石核（黒曜石）17点、楔形石器4点、黒曜石原石4点、黒曜石剥片堆積岩系石材大型剥片9点、その他の石材（珪岩や安山岩など）の剥片8点、珪岩礫2点・碎片189点、



第16図 B型13号陥し穴



第17図 B型陥し穴掘削工具痕のモデリング陽像  
実測図と刃先の形態(1/4)

る。また、後に細かな剥離で若干の抉り込みを行っており、石鏃として理解したい。黒曜石製。3は、局部磨製石鏃で押型文土器に伴うものらしい。黒曜石製。他は、8が黒緑色珪岩である以外は黒曜石である。

二次加工のある剥片、第9図14で、先土器時代の搔器に近似した形態である。黒曜石製。

亀甲形石器 第9図15で、一面が平坦に、一面が断面D字状に周縁から剥離され、方形に仕上げられる。一部に使用痕もみられる。珪岩製。須玉町郷蔵地遺跡<sup>1)</sup>にもみられることから、亀甲形石器と仮称しておきたい。

石核 黒曜石製石核を第10図2に示した。これに3の剥片が接合し、1の状態になる。

打製石斧 第10図5で、粘板岩製。基部を欠損する。

礫器 第10図4は、小型の両刃の礫器である。剥離境の稜線上に磨耗がみられる(斜線部)。磨耗は、刃部とは反対側の背面側にも広範囲にみられる。これは、この石器が、現刃部(最終段階の刃部)以前に、別の刃部を背面側に持っていて、使用が進むにしたがい刃部を更新していったものである可能性を示す。なお、初期の刃部は片刃であったことになる。第11図1は、珪質頁岩の大型剥片を利用したものである。これは、A型5号陥し穴に近接して出土した。

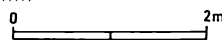
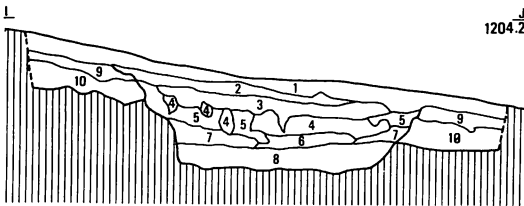
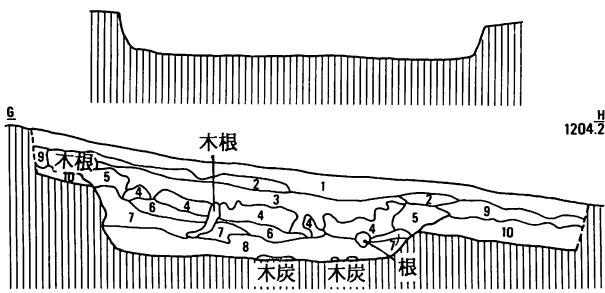
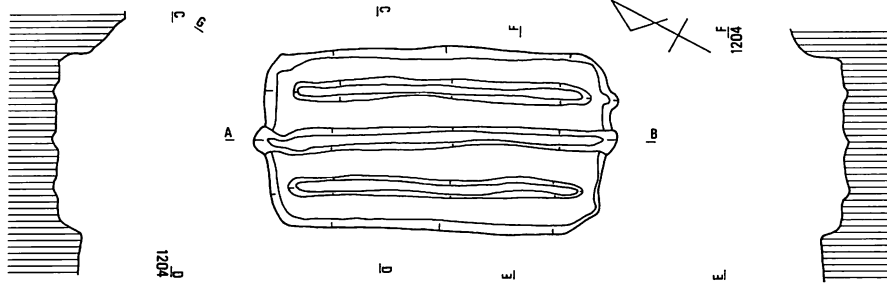
打痕ある礫 第10図6で、礫の周囲に一定方向からの打撃痕がみられる。珪岩礫である。

堆積岩系石材大型剥片 第11図2は、砂岩製の剥片で、刃部に使用痕(微細剥離)がみられる。また、一部に磨耗痕がみられるが、使用痕のある刃部とは一致しない。

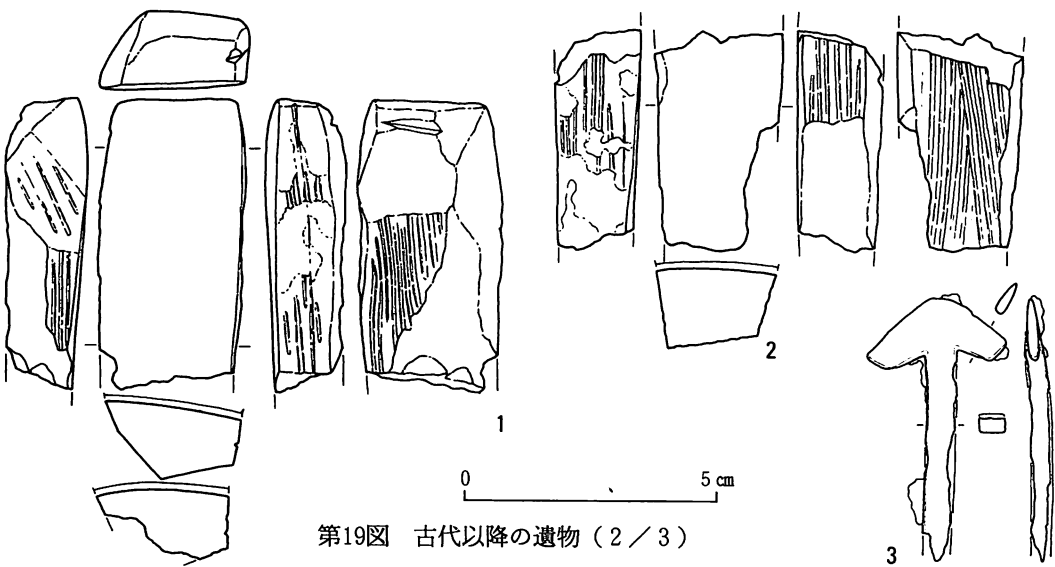
(打痕のあるものも含む)である。

石槍 第8図1は、粘板岩製である。基端部が一部欠損する。非常に薄身。風化が非常に進んでいる。第8図2は、安山岩製で、先端部・基部ともに欠損する。かなりの大型品と思われる。前者は、E地区より単独出土したもので、削剥された古いローム層の上面より出土。後者は、C区出土で、土器と混在した。縄文時代草創期初頭のものと思われる。

石鏃 第9図1~13である。1は、調整剥離の初期に、基端部に長軸方向の剥離を両面に行い、基部辺を確保している



第18図 C 2 号炭焼き遺構



第19図 古代以降の遺物 (2 / 3)

敲石・磨石類 第11図3・4で、いずれも付近にある安山岩礫を利用している。また、4は打撃痕がみられる。

## 第6章 弥生時代の遺物

### 第1節 土器

弥生時代については、遺構は確認できなかった。遺物としては、土器がある(第6図17~19、第7図12~15)。土器片110点、3個体である。いずれも壺形土器である。第6図15~17は、刻み目のある口縁破片である。第7図12は、下ぶくれ形を呈し、内外面ともハケメ調整されている。ミガキはない。13も同様な調整であり、胎土も近似するので、同一個体であろう。14・15は底部破片で、内外面ともナデ調整。いずれも、弥生時代後期の所産と思われる。

## 第7章 古墳時代の遺物

### 第1節 土器

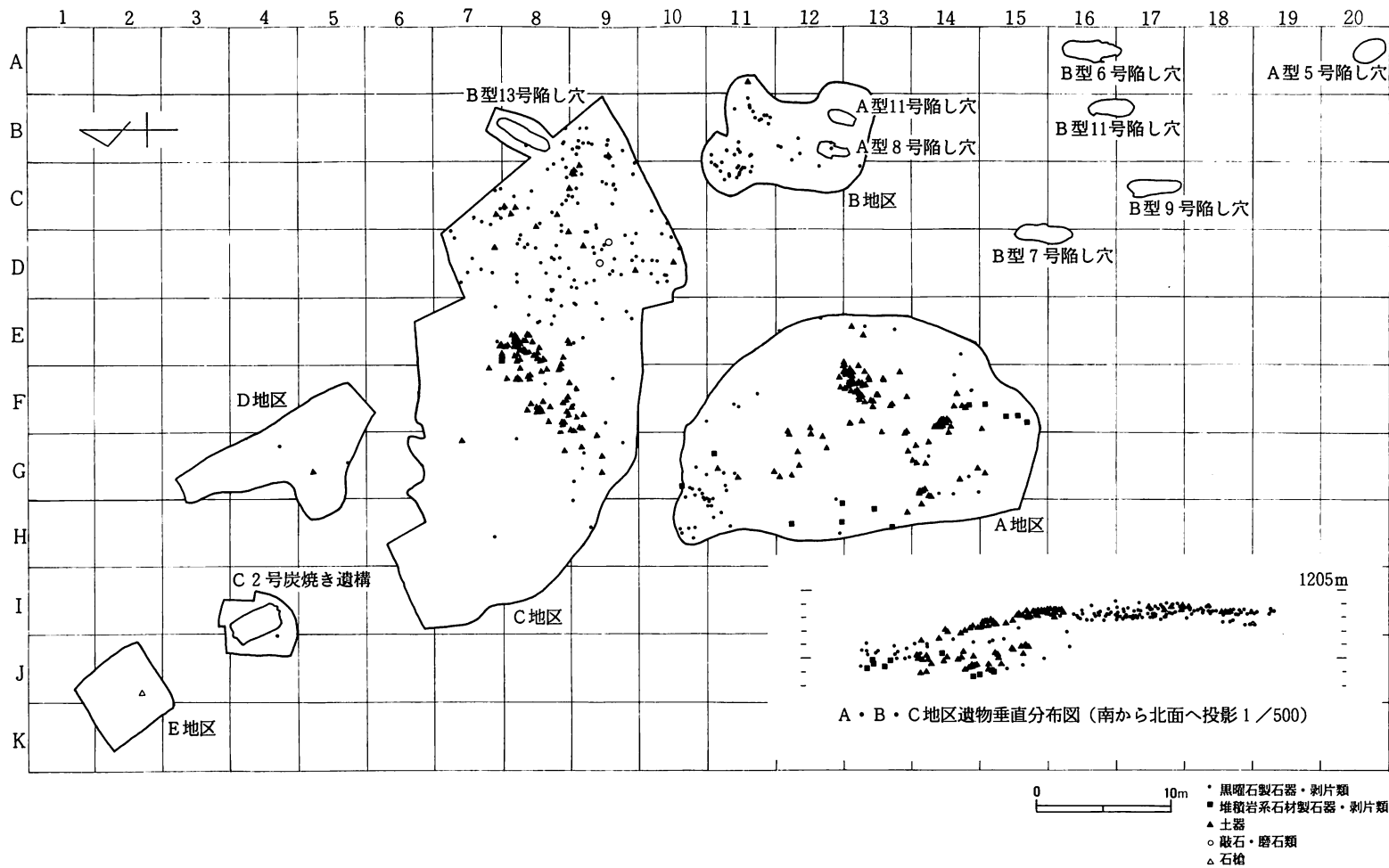
古墳時代についても、遺構は確認できなかった。遺物としては、高坏がある(第7図16)。土器片14点、1個体である。脚部の破片はまったくみられず、坏部のみがみられた。口縁部が直立ぎみに内傾し、胴下部にゆるい段がみられる。赤褐色の緻密な胎土である。内外面ともヘラミガキされている。古墳時代前期の所産と思われる。

## 第8章 古代以降の遺構と遺物

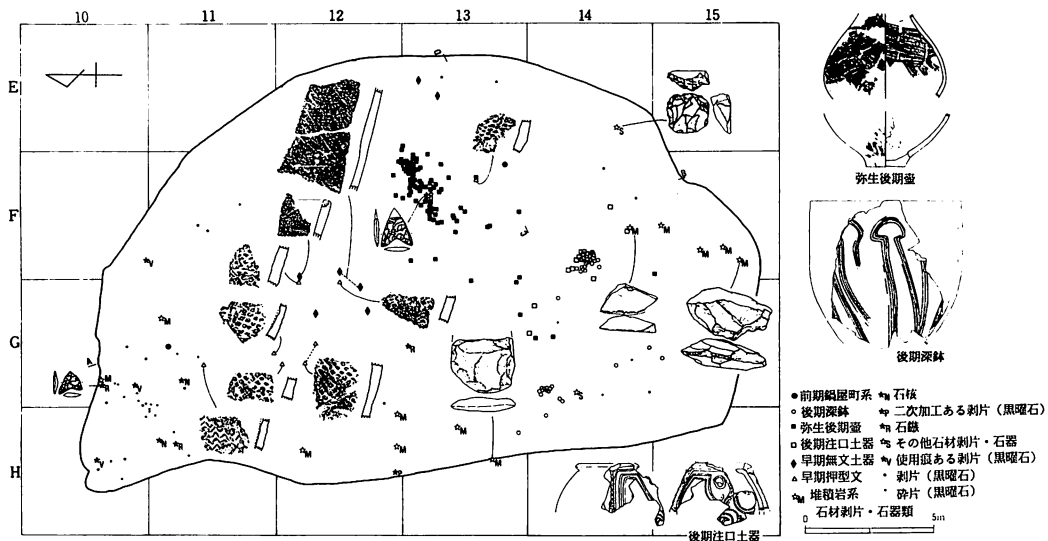
### 第1節 陥し穴

古代以降の遺構としては、まず陥し穴がある。1987年度範囲確認調査で発見されたもの4基(B型6号・7号・9号・11号陥し穴)と、今回確認されたもの1基(B型13号陥し穴)の計5基である。B型陥し穴とは、「長さ4m、幅1m程度の非常に細長い平面プランで、深さも1.5m程度と深く横断面がV字状を呈する<sup>9)</sup>」ものである。出土遺物は、B型13号陥し穴の覆土中から砥石が1点出土している以外みられない。また、両端部の底部付近に掘削工具痕がみられるものがある。さらに、黒色土層でも上位の漆黒色土層中より掘り込んでいる。こうした特徴から、古代以降、特に中世あたりの所産の可能性を考えておきたい。

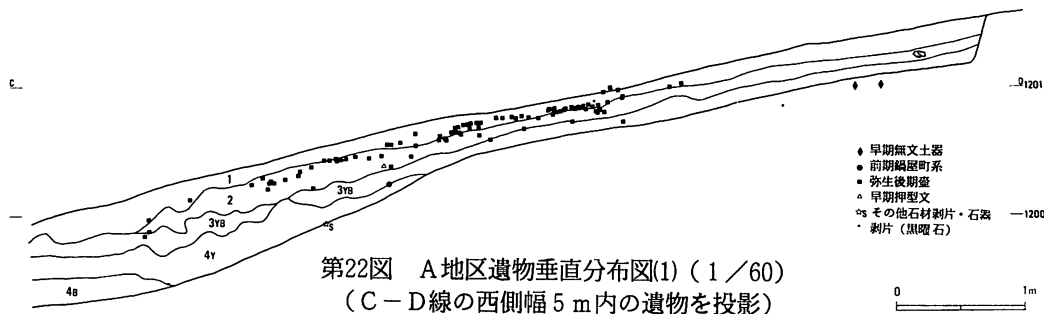
B型6号陥し穴(第12図) 長軸4.34m、短軸1.6m、深さ1.5mである。底部は細長く溝状で、底面には8ヵ所の穴が開く。土層は、1層腐植土層、2層砂質でやや硬い、黄色粒子を含む黒褐色土層、3層漆黒色土層、4層暗褐色土層、5層黒褐色土層で2・3層より明るく軟質でロー



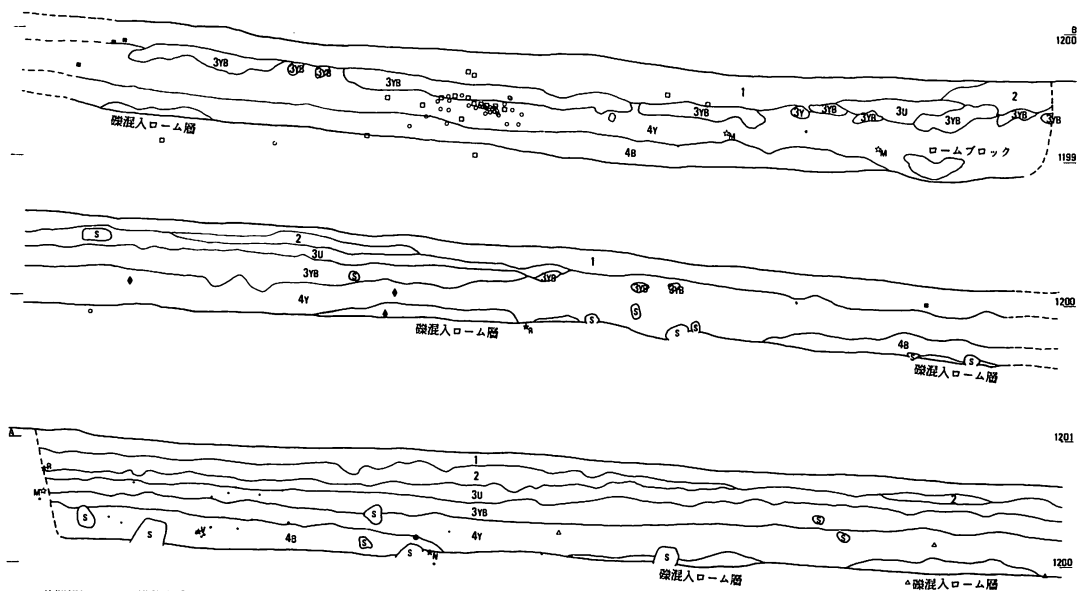
第20図 遺物出土状況全体図(1/500)



第21図 A地区遺物平面分布図(1/300)



第22図 A地区遺物垂直分布図(1) (1/60)  
(C-D線の西側幅5m内の遺物を投影)



第23図 A地区遺物垂直分布図(1) (1/60)  
(A-B線の西側幅3m内の遺物を投影)

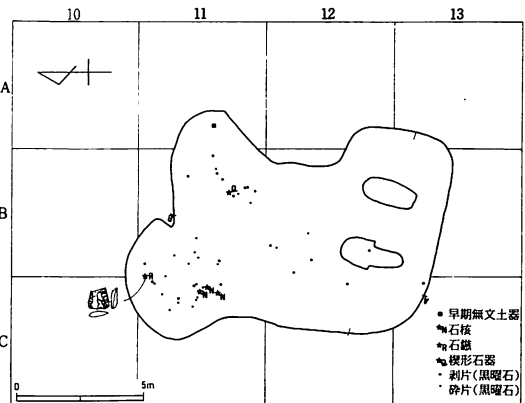


ム層ブロックを含む、6層軟質ローム層ブロック、7層ハードローム層ブロックで中位付近にPm-Iを含む、8層軟質ローム層ブロック、9層黒褐色土層で5層に近似、10層漆黒色土層、11層自然土層の黒色土層、12層攪乱層である。6～8層は、陥し穴側面が9・10層堆積直後の埋没過程で崩壊したものである。陥し穴の幅はさらに狭かったものと思われる。

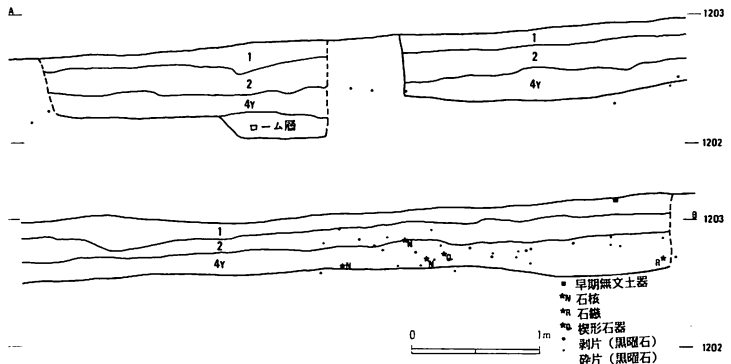
**B型7号陥し穴（第13図）** 長軸4.24m、短軸1.34m、深さ1.2mである。溝状の底部には7カ所の穴が開く。土層は、1層腐植層、2層黄色粒子を多量に含み、砂質で硬質の暗褐色土層、3層黒色土層で中央が黒味が強く、周辺ほど褐色がかかる、4層暗褐色土層、5層黒色土層ブロックやハードローム層ブロックを多量に含み非常に軟質な暗褐色土層、6層軟質ローム層ブロック、7層ハードローム層ブロック、8層黒色土層で底部付近がやや硬質、9層自然土層の黒色土層である。6・7層は、埋没過程に崩壊した、陥し穴の肩の部分と思われる。

**B型9号陥し穴（第14図）** 長軸3.98m、短軸1.26m、深さ1.2mである、底面に6カ所の穴が直列する。土層は、1層腐植層、2層黄色細粒子を多量に含む砂質の暗褐色土層、3層黒色土層で黄色細粒子を多く含む、4層ローム層ブロックや黄色細粒子を多く含む暗褐色土層、5層褐色土層でローム層ブロックを多く含み非常に軟質、6層黒色土層、7層自然土層の黒色土層ブロック、8層暗褐色土層でローム層小ブロックを多く含み軟質、9層軟質ローム層ブロック、10層ハードローム層ブロック、11層自然土層の黒色土層、12層自然土層の漸移層である。7～10層は、やはり埋没過程に崩壊した、陥し穴の肩の部分と思われる。

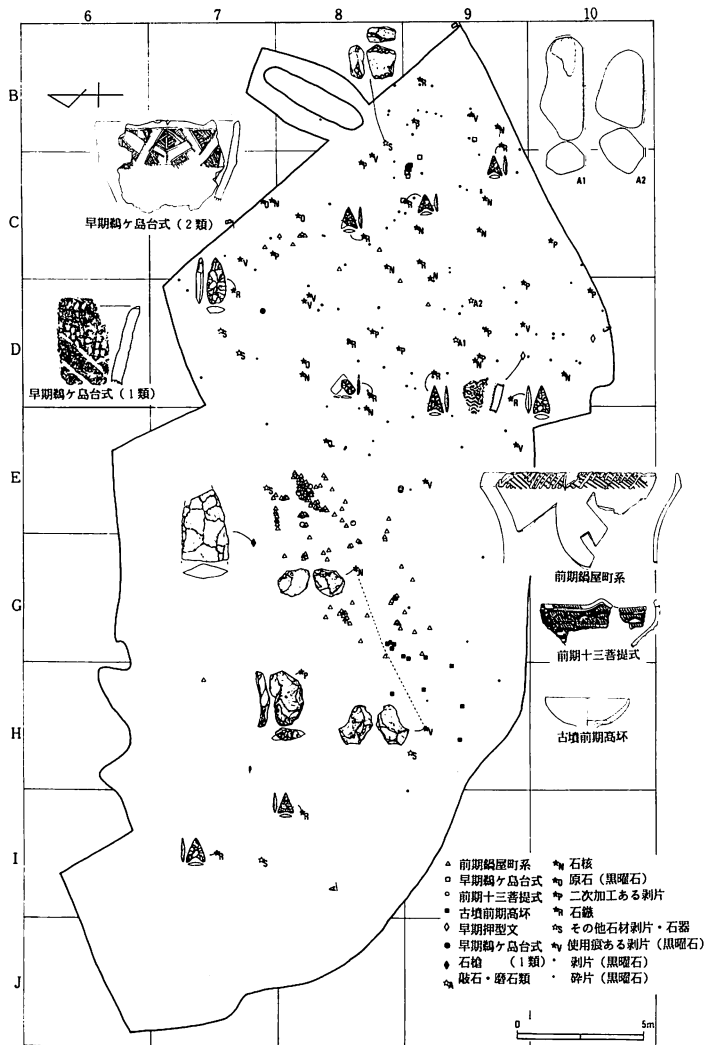
**B型11号陥し穴（第15図）** 長軸3.32m、短軸1.24m、深さ1.3mである。底面に6カ所の穴が直列する。土層は、1層腐植層、2層黒色土層で黄色細粒子を多く含み砂質、3層自然土層の黒色土層ブロックを多く含む暗褐色土層、4層黄色細粒子の団塊である黄色土ブロックでPm-Iブロックやローム層ブロック、黒色土層ブロックを含む、5層黄色細粒子を多く含み硬質の黒褐色土層、6層ローム層ブロックや黒色土層ブロックの混在する暗褐色土層、7層軟質ローム層ブロック、8層ハードローム層ブロック、9層軟化ハードローム層ブロックと黒色土層の混在層、10層漆黒色土層、11層自然土層の黒色土層である。や



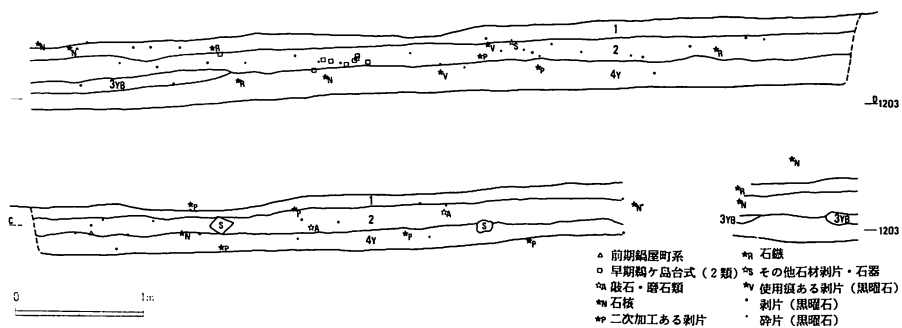
第24図 B地区遺物平面分布図（1/300）



第25図 B地区遺物垂直分布図（1/60）（全点を投影）



第26図 C地区遺物平面分布図 (1/300)



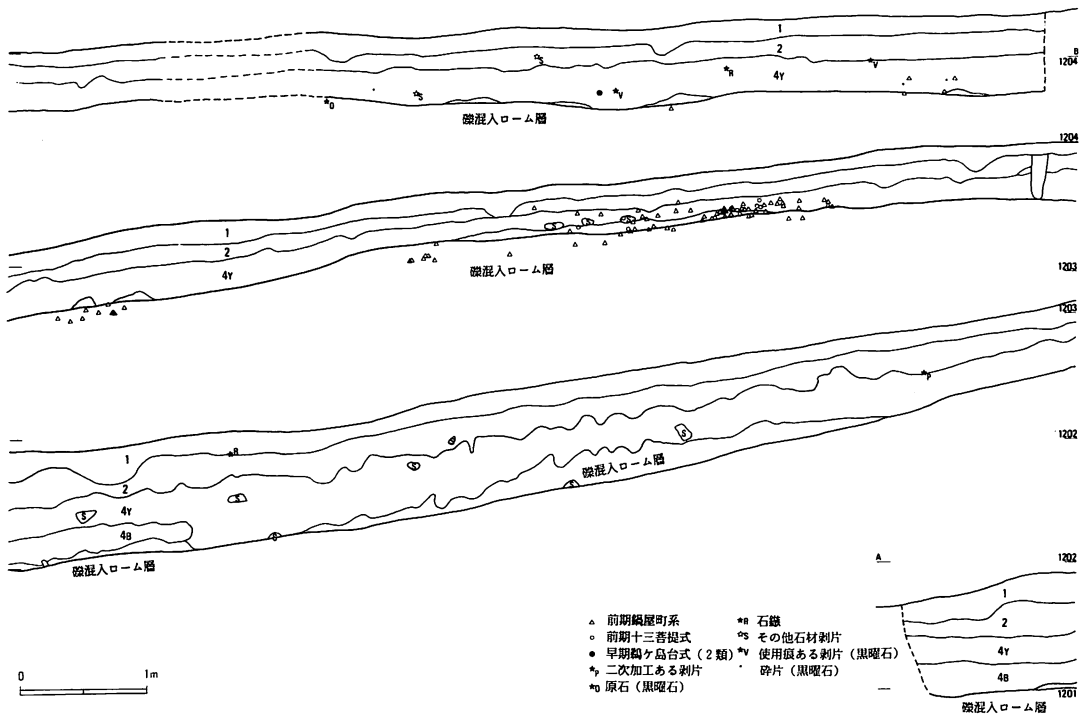
第27図 C地区遺物平面分布図(1) (1/60) (C-D線の北側幅7内の遺物を投影)

はり、肩部が埋没過程に崩壊している。

・B型13号陥し穴 (第16図)

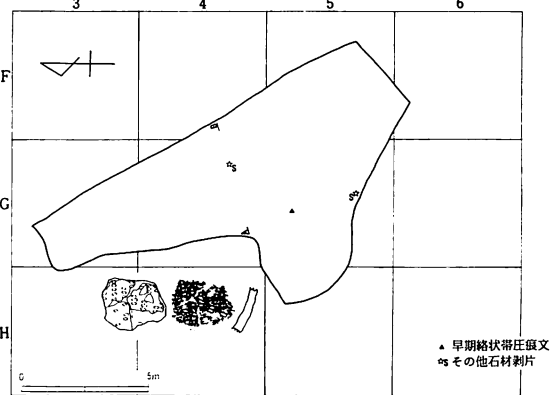
長軸4.34m、短軸1.04m、深さ1.1mである。底面に6カ所の穴が直列する。土層は、1層腐植層、2層やや砂質の黒色土層、3層黒褐色土層、4層漆黒色土層で自然土層の漆黒色土層より黒味が強く見える、5層硬質で黄色細粒子を含む黒褐色土層、6層黄色細粒子やローム層ブロックを少量含む黒褐色土層、7層軟質ローム層ブロックがラミナ状に入る暗褐色土層、8層若干の黒色土層が混在する軟質ローム層ブロック、9層軟質ローム層ブロック、10層漆黒色土層、11層自然土層の漆黒色土層、12層自然土層の黒褐色土層である。肩部の崩壊があったものと思われる。

ところで、これらの陥し穴には両端部の底面付近に、掘削工具痕が残存するものがある。この部分を石膏で型取り



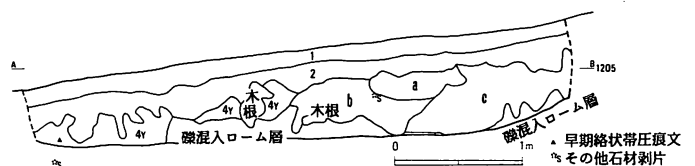
第28図 C地区遺物垂直分布図(2) (1/60) (A-B線の北側幅1.5m、南側幅2.5m内の遺物を投影)

し、モデリング陽像を作成した(第17図)。1はB型7号陥し穴の南側の掘削工具痕、2は同陥し穴の北側である。側面からみると、掘削面は弧を描き、掘削痕の上方への延長線とその弧との関係からして、工具には鈍角に柄のついた鍬のようなものであったと考えられる。断面観は、平坦であって、両端にやや丸みがある。また、2では、端部がくの字に折れ曲ったように若干の稜が付く。刃先の形態については、マーコで型取りし(第7図3~6・9)、それを重ね(第7図7・10)本来の形を复原した(第7図8・11)。3はB型11号陥し穴、4はB型7号陥し穴の南側、5がB型9号陥し穴、6がB型7号陥し穴の北側である。これらは同一の工具らしい。刃幅が13cmである。9は、1987年度調査の折に採取したB型2号陥し穴のもので、8よりも平縁で、刃幅が14cmと広い。



第29図 D地区遺物平面分布図 (1/300)

松井和幸氏によると、鉄製鍬先、鋤先は時代を経るにしたがい刃先が長大化し直線化するという<sup>9)</sup>。この点からすると、古墳時代から平安時代のU字形



第30図 D地区遺物垂直分布図 (1/60) (全点を投影)

鍬・鋤先よりも直刃でありより新しい要素があると言える。しかし、古墳時代後期頃に関東地域を中心に直刃のそれが分布することも考えると、一概に時期決定の材料ともできないようである。

## 第2節 炭焼き遺構

調査地域北側の尾根の傾斜面の下部に位置する。長辺3.7m、短辺1.9mの隅丸長方形の平面形を呈し、平坦の底面に長軸に沿って3本のごく浅い溝が平行して掘られていた。内中央の一本は、壁部分までくい込んで掘られていた。深さは、最も深い所で確認面より70cmである。土層は、1層腐植層、2層やや硬質の黒色土層、3層黒色土層で2層より黒味が強い、4層ローム層粒子を含みやや褐色味があり非常に硬質の黒色土層、5層ローム層粒子を多量に含み最も軟質で明るい黒色土層、6層木炭片をかなり含みやや硬質で4層程度の黒味をもつ黒色土層、7層ローム層と黒色土層が混和した暗褐色土層、8層木炭層で若干のローム層粒子や黒色土を混え下部ほど木炭片が多い、9層自然土層の漆黒色土層、10層自然土層の黒褐色土層である。

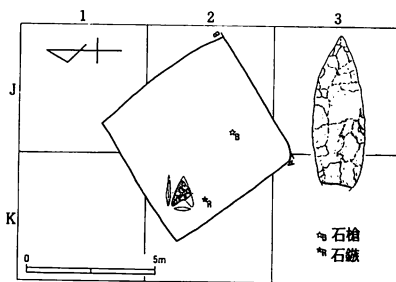
出土遺物は、木炭の他にないので時期の決定要素にかけるが、木炭の生産に係わる遺構であろうから、古代以降でも新しい段階のものであろう。なお、本遺構は1989年度調査でC2号炭焼き遺構としている。

## 第3節 遺物

古代以降の遺物としては、砥石2点と鉄鏃1点がある。

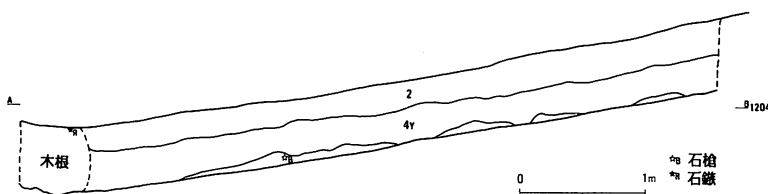
**砥石** 第19図1は、B型13号陥し穴の覆土の中位あたりから出土した。上面一面のみが研磨面で、他の面は素材整形時の調整面である。調整面には2種類あり、平坦な削り面と、櫛歯状工具による削り面とがある。また、一部に鋭い刃物で切りつけたような断面V字の条線もみられる。石材は、白色の凝灰岩と思われる。第19図2は表採資料である。上面のみが研磨面で、他は櫛歯状工具による調整面と割れ面である。石材も前者と同様である。

**鉄鏃** A地区より1点出土した。有茎の逆刺のあるものである。茎部は長く、断面が四角である。平安時代のものに比定できるかもしれない(第19図3)。



第31図 E地区遺物平面分布図(1/300)

## 第9章 遺物の分布状況



第32図 E地区遺物垂直分布図(1/60)(全点を投影)

遺物の分布はA～C地区に多い。土器はA地区とC地区の斜面に多く分布する。石器、剥片類はB地区やC地区の尾根上の平坦面に

多く分布し、A地区の谷底平地にも若干分布する。特に堆積岩系剥片がここに多く分布する。  
**A地区** 尾根の傾斜面から谷底平地にかかる地区である。傾斜面では、弥生時代の壺形土器が集中的に出土した。土器底部の数や胎土などから3個体程度だと思われる。また、谷底平地部分では、縄文時代後期の深鉢と注口土器が出土した。深鉢は2カ所に分かれて分布していた。さらに、谷底平地部分では、押型文土器片、堆積岩系石材剥片が特徴的に出土し、黒曜石剥片や石鏃などもみられた(第21図)。

土層と遺物の垂直分布の関係をみてみよう。基本土層は、1層腐植土層、2層黒色土層上半部にあたる漆黒色土層で、その上部が圧縮されて硬化している部分(2h層)が存在する所がある、3Y層黒色土層中に帯状にみられる黄色土層で、その上部が暗褐色土層になっている(3U層)部分もみられる、4Y層黒色土層下半部で黒褐色土層、4B層谷底部の特に黒色土層が厚い所で観察されるもので漆黒色土層である。傾斜面の弥生時代土器は、1層下部から2層上部にかけての浅い位置に集中した(第22図)。縄文時代後期土器は、3Y層下部から4Y層上部にかけて集中的に出土した。押型文土器片は4Y層の中位から下位にかけて分布していた。石器では黒曜石剥片などが3Y層、4Y層、4B層に分布し、堆積岩系石材剥片は、4Y層中位から下位から出土するものが多かった(第23図)。

**B地区** 北半部に黒曜石製石器や剥片が集中的に分布していた(第24図)。出土層位は、4Y層中を中心としている。尾根上平坦面で、南部にA型陥し穴2基がみられた。

**C地区** 尾根平坦面から傾斜面にかけての地区で最も多くの遺物を出土した。まず土器では、縄文時代早期の鶴ヶ島台式土器が平坦面上から、縄文時代前期の土器が平坦面肩部から傾斜面にかけて集中的に、古墳時代前期の高杯が傾斜面から出土した。黒曜石製石器・剥片類は、平坦面に主に分布する。敲石・磨石類が2点、平坦面より相近接して出土している点注目される。

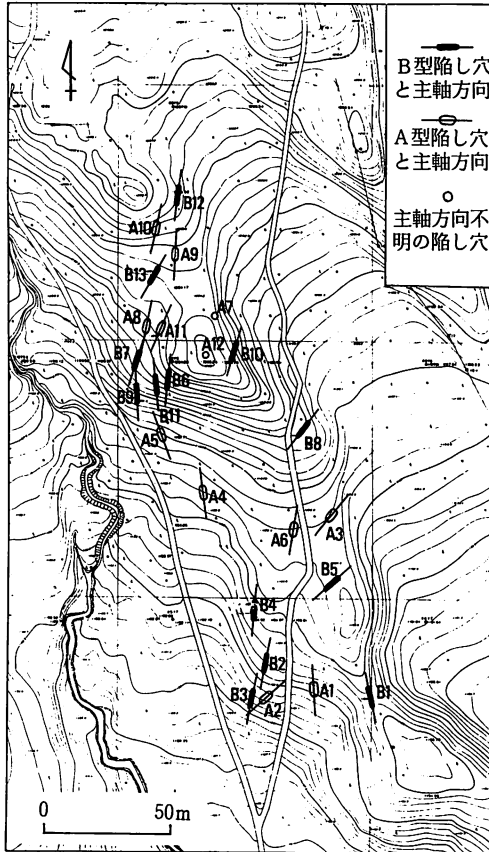
垂直分布をみると、鶴ヶ島台式土器は4Y層中位あたりから出土した。第27図の投影図では2層中にみえるが、この土層断面より傾斜面の上方に分布しているために見かけ上そうになっており、現地所見では4Y層中である。同様に、黒曜石製石器・剥片類も4Y層を中心に分布していた。また、縄文時代前期の土器群も4Y層中に分布がみられた。

**D地区** 絡条帯圧痕文土器1点と珪質頁岩製の剥片1点とか4Y層下部より出土した。また、風倒木痕がみられた。その土層は、9層ローム層ブロック、b層黒褐色土層、c層黒色土層である。b層中から珪質頁岩製剥片が出土した(第29・30図)。

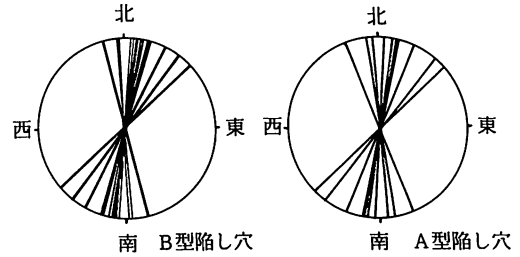
**E地区** 石槍1点が4Y層下底面から出土した。他に石鏃1点が出土した(第31・32図)。

## 第10章 結語

丘の公園第5遺跡は、25,000㎡にもおよぶ縄文時代以降の遺跡であり、今回の1,100㎡ほどの調査で、縄文時代草創期(石槍)、早期(押型文土器、鶴ヶ島台式土器)、前期(十三菩提式、鍋屋町式土器)、後期(堀之内式土器)、弥生時代後期、古墳時代前期、古代以降の遺物と縄文時代の陥し穴3基、古代以降の陥し穴5基、古代以降の炭焼き遺構1基を確認できた。



第33図 陥し穴の分布 (1/3000)



第34図 陥し穴の主軸方向  
(B型陥し穴の細線が張り出し部立地群、太線が肩部立地群)

今回の調査でいくつかの注目すべき点が見出された。以下に略述したい。

**黒色土層の年代** 本遺跡の黒色土層は上層から、1層腐植層、2層漆黒色土層、3 Y B層黄色土層、4 Y層黒褐色土層が標準的にみられる。遺物の分布をみると、2層中に弥生時代以降の土器がみられ、3 Y B層下部付近に縄文時代後期土器、4 Y層中に縄文時代前期から早期の土器がみられた。そして、4 Y層下底面に石槍が1点だけながらみられた。本地域では、黒色土層の下方には、Pm-I以下の古いローム層や泥流堆積物、火山灰層が削られたように分布し、その上で黒色土層直下にローム質の風化堆積物がみられた。

この風化堆積物は、河西学氏の分析により、A T以降のものとされた(付編2参照)。したがって、A T降灰以降の尾根全体の削剥、風化物の形成、黒色土層の堆積といった過程が推定できる。なお、3 Y B層上面付近でカワゴ平軽石(kg; 約2,800~2,900年前)が河西氏によって見出されており<sup>10)</sup>、今回の成果とよく照合する。

**遺物の分布と生活空間** 遺物の分布をみると、地形の違いで分布するものの種類が異なる。まず尾根上の平坦面では、黒曜石製剥片や石器の分布が広範囲でみられた。そして、敲石・磨石類がこの地形面のみにある。敲石・磨石類が地形の高い地点に偏在するありかたは、長坂町中込遺跡<sup>11)</sup>でも観察されている。このことは、敲石・磨石類を使った作業とその地形との強い関連性を推測させる。また、縄文時代早期の鶴ヶ島台式土器が分布していた。この時期の生活空間がこの付近に存在していたことを推定できる。

傾斜面上には、土器の分布が主体であった。縄文時代前期土器が2個体、弥生時代後期土器が3個体、古墳時代前期土器が1個体で、いずれも1カ所に集中的に分布していた。いずれも完全に復原はできないものの、かなりの部分が存在する。傾斜地という地形の特徴からして、一般生活が展開されたとも思えない。各個体が集中分布するありかたは、その地点に土器をまとめて放置した状態と受け取れる。それが、完全な個体であったか、割れていたものかは問え

ないが、生活空間から離れた地点に土器をまとめて放置した行為は復原できよう。特にその行為が、本地域では住居址や集落などのみられない弥生時代や古墳時代にみられる点に注意すべきであろう。すなわち、その行為が、その時代の生活サイクルの中での特異な位置付けが想定できると思われる。

谷底平地には、堆積岩系石材剥片が偏在した。これを使用した作業空間の想定が可能である。より河川に近い位置に作業空間を設定する必要性があったのだろう。この他、黒曜石製石器・剥片や、縄文時代早期押型文土器や条痕文系土器、後期の堀之内式土器が分布していた。後期の土器は注口土器と深鉢の2個体であり、両者が一カ所で混在していた。傾斜面の土器分布と同様、まとめて放置されたと理解できる。一方、早期の土器は小破片で、分散している。両者の意味合いの違いに注目すべきであろう。

ところで、黒曜石製剥片・石器類について、個体分類を行い、接合作業を実施し、その分布を観察した。図は提示しなかったが、次のような所見を得た。個体は、大まかに13個体（内単独個体3点）に分類できた。さらに細分は可能であるが、一応目安とした。接合は個体2点のみであった。分布をみると、必ず2地区以上に分布し、各個体は集中的に分布せず分散分布していた。こうした状況は、先土器時代の石器・剥片類の集中するありかたと相異なる。おそらく、一カ所で集中剥離を行わず、小規模な剥離を行って他所へ移動するような行動が重複しているものと考えられる。平坦面のある広がりをもった空間を剥離作業や石器作り、その使用の場としていたのだろう。その所属時期については限定できないが、周辺に分布する土器や4 Y層中を中心に分布する点から、縄文時代前期から早期にかけてのものであろう。

陥し穴の立地 次に陥し穴分布を、1987年の調査で確認したものも含めてみてみよう（第33図）。縄文時代のA型陥し穴と古代以降のB型陥し穴とでは立地が異なる。A型陥し穴は、尾根の鞍部の平坦面や、尾根の西側にみられるノッチ状の地形の傾斜面にある。B型陥し穴は、尾根東端の肩部にあるもの（肩部立地群）と、西側に張り出した高地の肩部に集中的に分布するもの（張り出し部立地群）とがある。主軸の方向をみると（第34図）、A型、B型とも大きな違いはないが、B型陥し穴で張り出し部立地群が真北からやや東よりに主軸をむけるものばかり（磁北を意識か）で、肩部立地群には方向の斉一性がみられない。現地での印象では、A型陥し穴は周囲に高所があり、高所から目視できるが谷底平地からは目視できないような場所にある。B型陥し穴は、それ自身の位置が高所であり、谷底平地からもよく目視できる。両者の立地の違いは、これを用いた狩猟のありかたの違いを示している可能性が窺われよう。

#### 註

- (1) 山梨県教育委員会 1986『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』
- (2) 山梨県教育委員会 1985『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』
- (3) 山梨県教育委員会 1987『丘の公園地内遺跡範囲確認調査（第1次）報告書』
- (4) 山梨県教育委員会 1989『丘の公園第2遺跡発掘調査報告書・丘の公園地内遺跡範囲確認調査（第2次）報告書』
- (5) 註4に同じ
- (6) 高野玄明 1989「丘の公園地内遺跡範囲確認調査（第2次）（丘の公園第5遺跡）」註4文献所収
- (7) 山梨県教育委員会 1987『郷蔵地遺跡』P13
- (8) 註6に同じ
- (9) 松井和幸 1987「日本古代の鉄製鋤先、鋤先について」『考古学雑誌』第72巻第3号P44
- (10) 河西 学 1989「丘の公園地域のテフラと地形」註4文献所収
- (11) 山梨県教育委員会 1990『中込遺跡』

## 付編 1

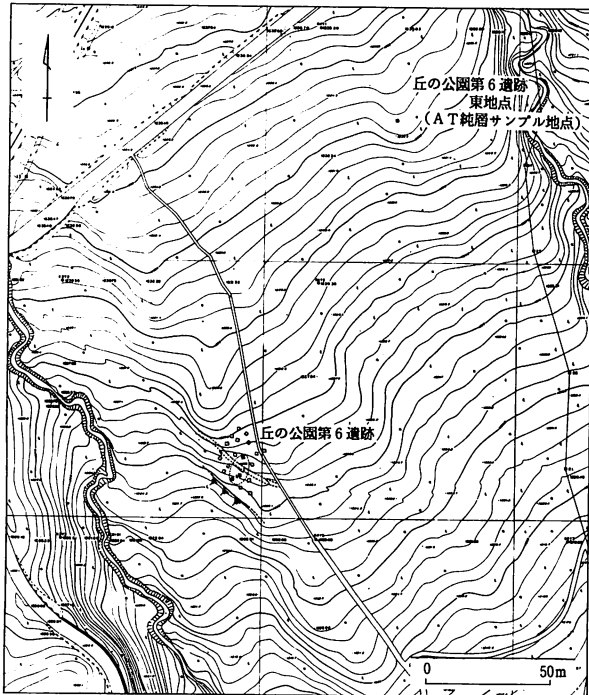
# 丘の公園第 6 遺跡範囲確認調査

### 1. 調査の経緯

丘の公園第 5 遺跡の調査の折に、その北方にある時代不明の溝の調査を行ったが、その際に溝の中から先土器時代の槍先形尖頭器が出土した。溝の調査地域の南端部に当たる地点である。その時代の遺跡の存在が推定された。そこで、山梨県教育委員会文化課と山梨県企業局とで協議し、まず範囲確認調査を行うことにした。調査は溝の調査と併行して、1988年 5 月 19 日から 5 月 24 日にかけて行った。調査の結果、遺跡は南北 12m、東西 7m ほどの範囲であることが判明した。そこで再び協議し、その結果、埋土して現地保存することとなった。本地点はゴルフコースの東縁部にあり、小範囲であるため、木根などを伐根せずに 50cm 程度の埋土を行い、芝生を張って現状保存が可能との判断である。

### 2. 調査の方法

石器等が出土した溝部分を中心に、周囲に 19カ所の試掘坑を、おおむね 5m 間隔で設定し、遺構、遺物の有無を確認した。試掘坑は、おおむね 1.5m 四方、深さ約 1m で、ローム層を 50cm 程度掘り下げる深さまで、手ガンナを用いて掘り下げた。その結果、溝付近の 3カ所の試掘坑から黒曜石製剥片や石器が出土した（第 36 図）。なお、遺物の出土した試掘坑 1カ所で土壌



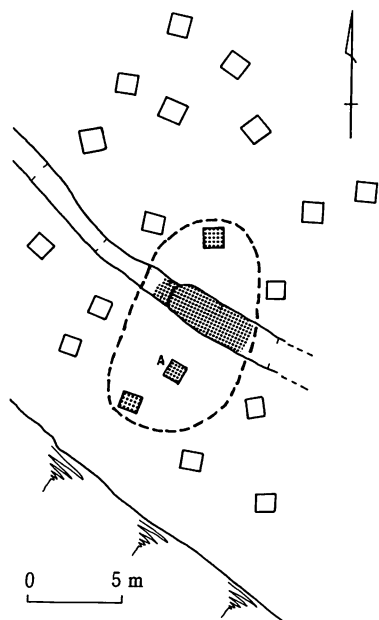
第 35 図 丘の公園第 6 遺跡周辺の地形 (1/3000)

分析のサンプリングを行った（第 36 図）。また、北東方約 150m の地点で A T 純層を発見した（第 35 図）。いずれも、帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏が分析し、付編 3 で詳述する。

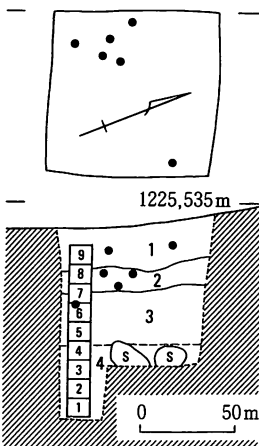
### 3. 遺跡の立地

遺跡周辺の地形をみると、遺跡西面に比高 2m 程度のゆるやかな傾斜をもつ崖線が南北方向に発達している。遺跡はその肩部に立地するが、肩部は西方からみると、若干の高まりをみせる。この崖線と高まりは南方へ連続し、丘の公園第 5 遺跡のやせ尾根へとつながっている。





第36図 丘の公園第6遺跡の範囲と試掘坑の配置図(1/400)  
網点部分が遺物の出土した地点。Aが土壌サンプルを採取した試掘坑。



第37図 土層断面図と土壌サンプル採取位置(1/40)

一方、遺跡西側は、広い平坦面となっている。所々に礫が露出し、現河川面からは離水しているものの、古い時期の削剥面であると思われる。

#### 4. 土層

こうした平坦面には、ほとんどローム層の発達が見られないが、小起伏上に削り残されたようにローム層がみられる。本地点もそうした地点の一つである。土層断面図を、遺物の出土した試掘坑1カ所で作成した(第35図)。1層漆黒色土層、2層黒褐色土層、3層軟質ローム層で、破線以下の4層は軟質ローム層を基調に直径50cmから拳大ほどの円礫が多く入る。なお、遺跡西方で崖線が重機により深く削られていた(図版5)が、その断面をみると、軟質ローム層は1mほどで、以下は礫層が発達していた。なお、土壌分析の結果、3番のサンプル位置にA Tの降灰面が推定された(付編3参照)。

遺物は、溝の断面精査時においても、2層黒褐色土層下部に多くみられ、一部に軟質ローム層上部に入るものがみられた。

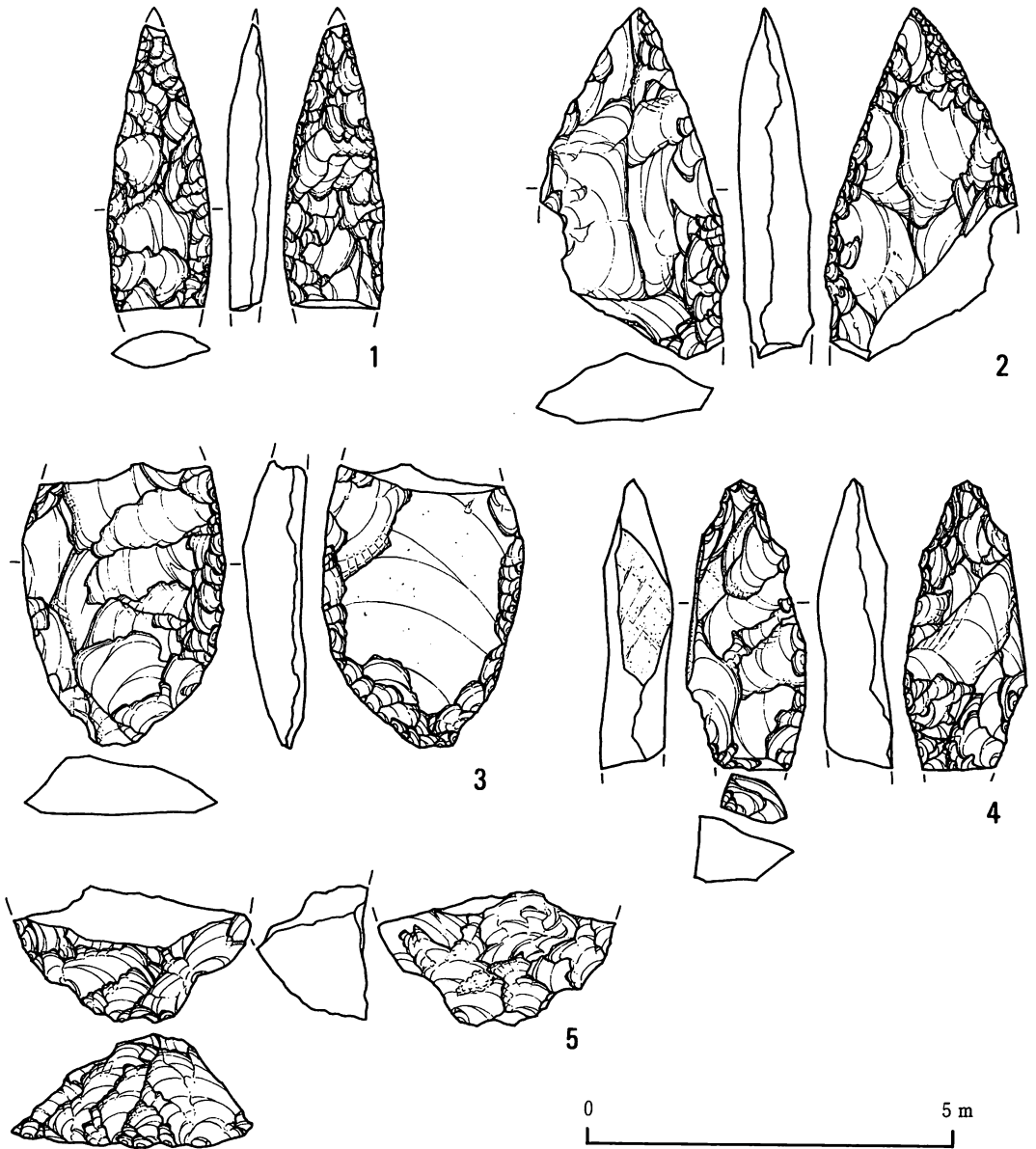
#### 5. 出土遺物

遺物は、遺跡内の北端の試掘坑から剥片1点、南端から槍先形尖頭器1点(第38図2)、中央から剥片5点(第39図4)、破片1点が出土した。出土遺物の大半は溝覆土中のもので、槍先形尖頭器4点、剥片13点、破片19点である。

##### 槍先形尖頭器

5点出土した(第38図)。1は基部側を欠損する。また、先端も若干欠損する。非常に細身で、厚さも比較的薄い。最も古い剥離は右側図の基部側中央部に残存するものであるが、素材面ではなく、槍先形尖頭器の調整に入って以降のものである。これとの前後関係は不明ながら、より古い段階のものが、左側図右縁部全体の小剥離群で、打点は見られない。次いで右側図左縁部全体の小剥離がなされ、右側図右縁下方の打点のみ見られない大規模剥離群へと進む。その後、左側図左縁部全体の大規模剥離(先端部は小規模)群が剥離され、右側図先端部の剥離で調整を終了する。打点の残存する剥離群には、その縁部に微細な剥離が連続的にみられる。

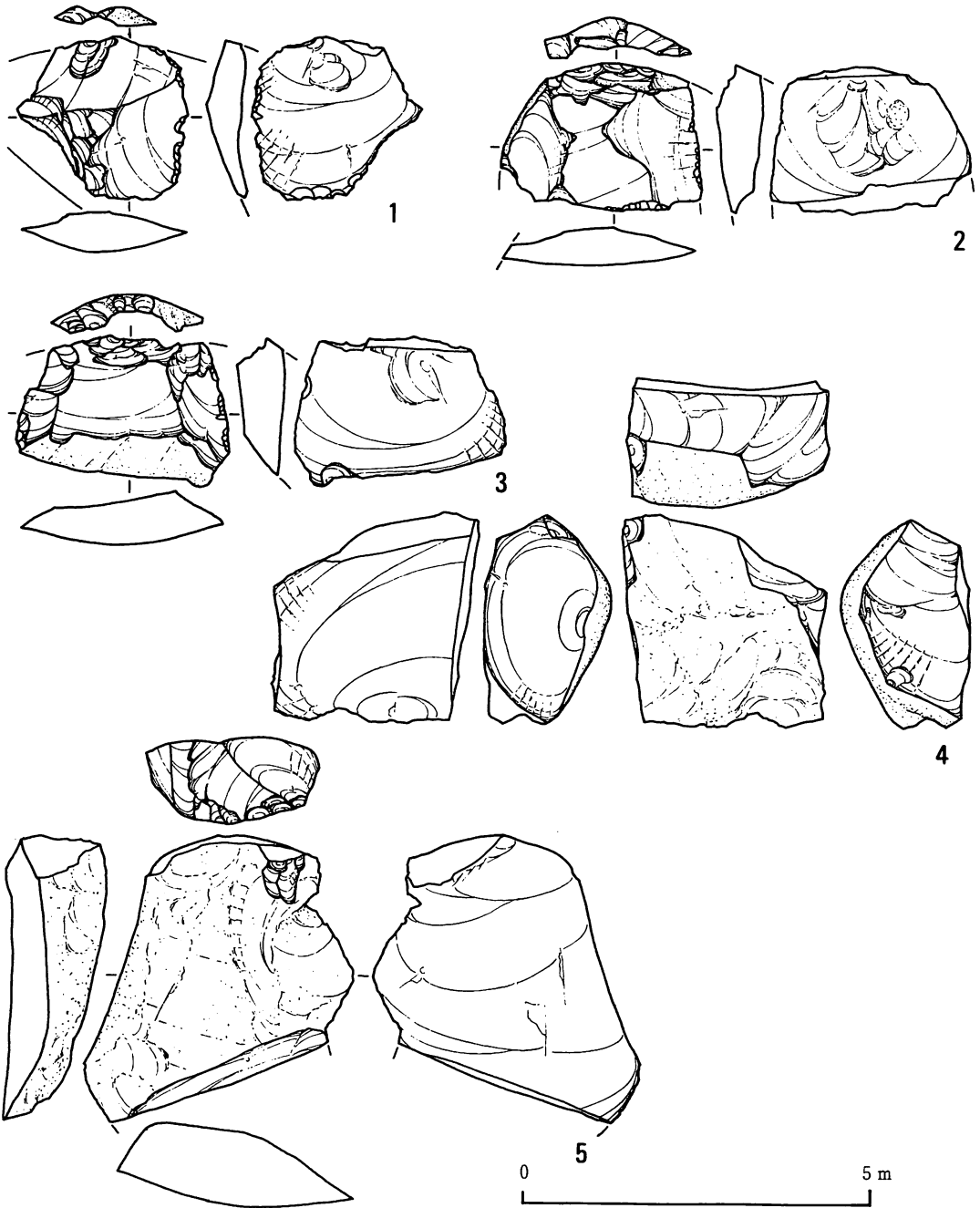
2は、基部側を大きく欠損する。幅広で、断面が二等辺三角形状を呈する。左側図左縁基部



第38図 丘の公園第6遺跡出土礫(1) (1/1)

側の大きな剥離1枚が最も新しく、この剥離段階で欠損した可能性がある。左側図の他の剥離は、ほとんど右側図の剥離より古いものと思われる。そして左縁から右縁へと進んでいる。右側図の剥離群も同様に、左縁から右縁に進む。大規模剥離の後、縁部を小規模剥離しているが、折れの原因を前述のように推定すると、この小規模剥離は次の打撃のための調整という意味合いも出てくる。両面の大規模剥離を比較すると、左側図のものが二等辺三角形の二辺を成し、高まりを作るように剥離され、右側図のものは、底辺を成し平坦に剥離されている。

3は、先端部を欠損する。非常に幅広であるが比較的薄い。右側図中央は、古いポジティブな剥離面で占められている。他の剥離面と違い、不定方向の擦痕が無数にみられる。最も古い



第39図 丘の公園第6遺跡出土石器(2) (1/1)

剥離面は左側図左縁部の大規模剥離群で、次いで左側図右縁側からの大規模剥離や右側図右縁の小規模剥離へと進む。最終的に左側図右縁の小規模剥離で終わるようであるが、両面とも先端部側は工程を異にするようである。左側図左縁先端部側に小規模剥離がみられ、右側図右縁先端側の1枚の剥離の後に剥離される。右側図左縁先端部側に大規模剥離1枚がみられるが、その基部側の小規模剥離群より古い。

4は、基部側を欠く。また、左側図左縁に自然面を残す。断面図にみるように、2面の自然面は90度近い角を成す。おそらく角礫状の素材を用い、その横口面を刃縁に変える調整剥離がなされている。まず、右側図右縁で自然面を打面に、自然面に対して90度近い角度の平坦な剥離がなされる。次に、それを打面として左側図左縁でかなり急角度の剥離が縁部を挟り込むようになされる。この剥離は、先端側と基部側の両端部にしかなされず、中央部の自然面を刃縁に変えるには至っていない。左側図右縁部の剥離については、左側図のものが右側図よりも古いようである。なお、基部が欠損した後に、その面に若干の剥離がみられる。

5は、基部破片と思われる。断面D字形の部厚いものと思われる。右側図の剥離は求心的で平坦なものである。左側図の剥離はかなり急角度で、一見搔器の刃部と見まがうほどである。

#### 剥片

剥片は合計19点、破片が20点出土している。このうち、比較的大型のものを示した（第39図）。1は、先端部に近い部分の調整剥片と思われる。背面打面部側の大規模剥離面は、打撃方向からして素材時の剥離面かもしれない。打面の一部に自然面を残す。打面中央には背面側に挟るような剥離がみられる。

2は、左側図左縁に自然面を残す。縁部が丸く、基部付近の調整時のものであろうか。打面から背面側に小規模な平坦剥離が、打面から背面を挟るようになされている。末端部は折れというよりヒンジフラクチャーかもしれない。

3は、背面末端部と打面の一部に自然面をもつ。やはり打面から背面を挟るような平坦剥離が、かなり深くなされている。

1～3は、打面と背面の角度が槍先形尖頭器の刃縁ほどの鋭角にはなっておらず、かなり初期の段階の調整剥片であろう。

4は、角柱状の部厚い剥片で、あたかも原石を分割したような状況にも見受けられる。背面に広く自然面をもつ。

5は、背面に自然面を持つ大型剥片である。4・5は、槍先形尖頭器の素材となる剥片であろう。

以上の石器、剥片の石材は全て黒曜石である。

## 6. 小結

非常に小規模な遺跡であり、資料も少ないが、この調査で得られたいくつかの所見をまとめてみたい。

#### 立地

河川の浸食によって形成された小崖線の肩部に立地する。西側に現河床をひかえる。この立地は、同じ槍先形尖頭器を出土した丘の公園14番ホール遺跡と近似する。また、ナイフ形石器を主体とする丘の公園第2遺跡や丘の公園第1遺跡といった大集落が、地滑りによって形成された平坦面の中央を広く占居するありかたとは相異なる。ナイフ形石器文化の集落立地と槍先形尖頭器文化のそれとで相異していると理解する。これは、生業などのありかたなどの違い

と関連している可能性も考える。

#### 時期

土壌分析の結果、A Tより上位であることは明らかである。また、黒色土層下部を中心に軟質ローム層上部まで分布がみられるありかたは、丘の公園14番ホール遺跡と近似する。石器の形態では、第38図1のような細身で薄手のものが含まれる。こうした状況からして、先土器時代最末期あるいは縄文時代草創期の初期に入る可能性を考えておきたい。

#### 槍先形尖頭器の製作過程と形態

まず、素材であるが、角柱状に原石を分割したような部厚い剥片と比較的薄手で板状の剥片とがある。後者の打面をみると90度打撃方向が変化するようなありかたが窺え、こうした打面転移のくりかえしにより剥片素材を剥離するような過程が考えられる。いずれの剥片素材にも刃縁を成さない小口部分が存在する。槍先形尖頭器の製作過程では、この小口部分を刃縁に変える過程が含まれる。これは、第38図4にみられるもので、まず小口面を打面に平坦な段階状剥離をおこない、その剥離面を加撃して刃縁を形成する。この過程によると、一面が平坦で反対面が高まりをもつ、二等辺三角形やD字型の断面観を形成することになるのだろう（第38図2～5）。なお、この平坦な剥離の段階に第39図1～3のような、打面から背面を抉るような剥離のみられる剥片が出現する可能性がある。

こうした過程の後、第38図1のようなレンズ状の断面観をもつ細身で薄手の槍先形尖頭器が作り出される可能性は十分考えられる。本遺跡から出土した槍先形尖頭器の示す形が、使用に供されたものの姿であるかは不明とせざるを得ない。しかし、第38図3、5のように、基部を丸く整形するような意図が窺われるものもあり、一概に第38図1のようなものばかりが目的の形態ではないと言えるような状況もある。ここでは、一応、細身薄手の形態と、幅広で比較的厚手の形態の2形態の存在を推定しておきたい。

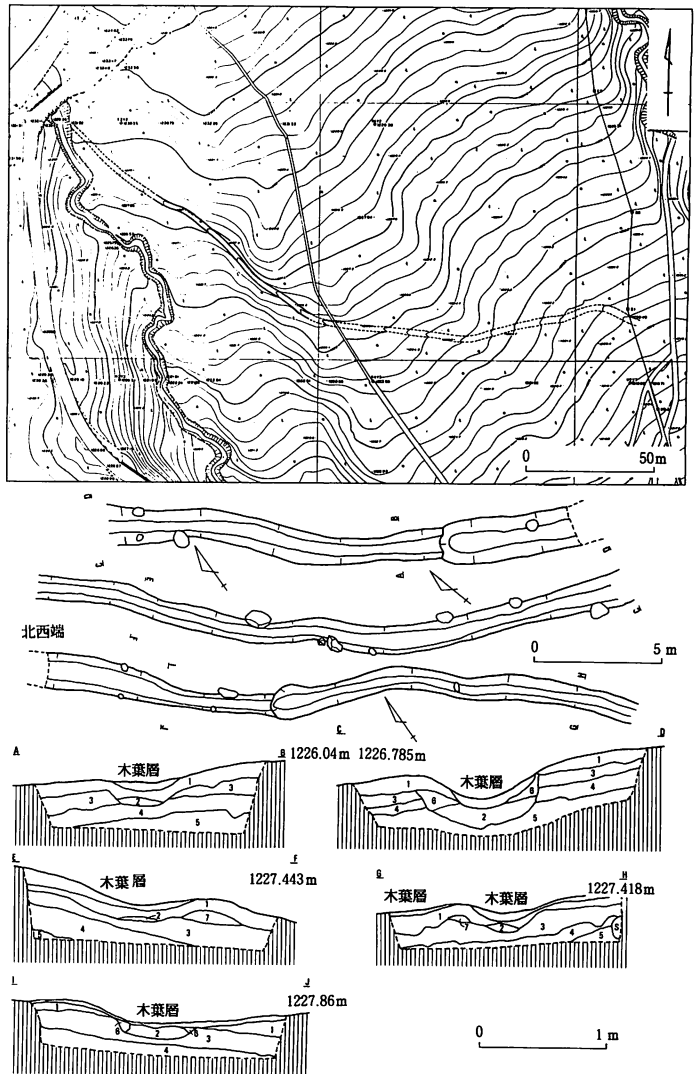
## 溝の調査

### 1. 調査の経緯

この溝は、1984年の分布調査の折に地表観察でその存在が確認されていた。十分埋没していないので比較的新しいものと推定されるが、甲斐国志にみえるように、念場千軒に伴う中世の溝の伝承に符合するものである可能性も考えられた。1988年の丘の公園第5遺跡の調査の際に、ゴルフコースがこの溝にかかることが避けがたいこととなり、溝東部は埋土で保存できるものの、西部については掘削が避けられないということで、調査を行うこととなった。調査は、1988年5月16日から5月24日にかけて行った。

### 2. 調査の成果

溝は、JR小海線直下の沢口から高地を横断し、東側の沢へと連絡していたようである。勾配がゆるやかながら、南東方へ下がる傾斜をもつ。幅1m深さ10~60cmほどで、部分的に幅1.5~2m、深さ50cmから1mと幅広く深い部分がある。土層は1層腐植土層、2層砂礫層、3層漆黒色土層、4層黒褐色土層、5層軟質ローム層、6層軟質漆黒色土層、7層暗褐色土層で、2層の存在から水を流したと考えられる。7層は土堤状の盛土と思われる。北部から2層中に石炭ガラが多量に出土し、小海線開通（1933年）から終戦直後まで溝が機能していたと考える。ただし、その形成年代は不明とせざるを得ない。



第40図 溝位置図（上段 1/3000）、溝全体図（中段 1/300）、溝土層断面図（下段 1/60）

## 付編 3

# 丘の公園第 5 遺跡・第 6 遺跡のテフラ

### 1. はじめに

丘の公園地域では、すでに丘の公園第 2 遺跡および 14 番ホール遺跡など数地点でテフラの検出を行っている。これらの遺跡と隣接した第 5・第 6 遺跡において褐色風化火山灰層の層位の判定と地層堆積の調査を目的としていくつかの地点でテフラ分析を行った。

第 5・第 6 遺跡は、礫層からなる八ヶ岳南東麓扇状地のうち、尾根部とが分化した小海線より南側に位置する。第 5 遺跡は、南北にのびる尾根部の西側斜面に、第 6 遺跡は火山麓扇状地面とそれに接する谷底低地との崖線斜面上に立地する。尾根部には御岳第 1 軽石 Pm-I とそれ以上の風成火山灰層が厚く堆積している。第 5 遺跡付近から以北ではより下位の泥流あるいは岩屑流堆積物が基盤をなし、褐色風化火山灰層をほとんどのせず直接黒色土が堆積している。第 5 遺跡の立地する尾根部西斜面では、Pm-I より下位の赤褐色スコリアが下部礫層中に検出されるがその上位には褐色風化火山灰層の堆積は見られず黒色土に直接覆われる。谷部は、現河床から上に厚さ約 60cm の礫混じり黒色土層が堆積し河道に沿った狭小な谷底低地を形成している。また第 6 遺跡東地点では厚さ 10cm の始良 Tn 火山灰 (AT: 町田・新井、1976) が露出する。

### 2. 試料および分析法

第 5 遺跡では、A・B・C の 3 地点において試料を採取した (1 頁の第 1 図参照)。A 地点は尾根稜線部の平坦な地点で、B・C 地点は西斜面下部であり C 地点では下部礫層と厚さ 23cm の硬質の褐色スコリア層が露出している。

第 6 遺跡では、発掘担当者の保坂康夫氏が 1 地点で採取した試料を用いた。また第 6 遺跡東地点で AT の純層が発見されたので分析を行なった (26 頁の第 35 図参照)。

テフラの抽出方法は丘の公園第 2 遺跡と同様である (注 1)。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木 (1980) の方法にしたがい、細粒鉱物粒子を包有する F 型火山ガラスは F' 型として区別した。屈折率の測定は新井 (1972) の方法にしたがった。

### 3. 分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第 1・2 表に示す。これをもとに粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、形態別の火山ガラス含有量および重鉱物組成を第 1・2・3 図に示す。なお形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの 1/4~1/16mm 粒径の火山ガラスの割合で表示した (注 2)。また屈折率測定結果を第 3 表に示す。以下に各地点ごとの鉱物組成の特徴について述べる。

#### 第 5 遺跡 A 地点

粒径組成では、砂含有率がどの試料でも 10% 以下と極めて低率である。軟質褐色ロームであ

第1表 丘の公園第5・第6遺跡試料の計測粒数（+は計数以外の検出を示す）

地点	丘5A							丘5B					丘5C					丘6										
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6	No. 5	No. 4	No. 3	No. 2	No. 1		
試料番号																												
A 無色	3	5	7	1	1		1	5	7	5	6	14	11	1	3	1	1		39	47	42	58	83	105	71	30	10	
A' 無色	12	17	12	9	1	2	2	24	20	22	29	29	22	10	5	4	2	5	66	78	92	126	193	199	162	47	17	
A' 褐色		1						1							1	1						1						
B 無色	37	27	27	26	43	46	32	29	18	27	22	22	15	34	23	25	25	13	31	25	24	31	15	8	7	8	12	
B 褐色										1																	1	
C 無色	2	4	3	3	5	2		11	7	9	7	17	9	4	4	4	5	3	23	14	11	19	17	11	12	15	13	
C 褐色														1									2				1	
D 無色									1			1	1	4					2		1	3	4	4	1	1		
E 無色											1		2	1			1		3	1		1		1				
F 無色	19	34	19	28	24	42	22	18	19	20	26	9	9	17	25	10	9	12	34	18	7	10	12	9	7	10	7	
F 褐色	2		3			1			2	3			1					1	1	2				2		1		
F 緑褐色																			7									
F' 無色				1				7	2			4	1	1	1		1	1	5	1			1		2	2		
F' 褐色								1				1	1	2				1	2							6		
F' 緑褐色															2				3									
石英	32	27	23	25	24	21	23	15	12	13	17	15	19	21	16	7	9	16	17	23	28	22	13	16	6	17	10	
長石	70	64	47	40	52	37	39	97	124	105	98	102	107	34	26	42	34	33	44	77	69	79	51	53	53	110	154	
カンラン石	1	2	2	4		2	1	2	1	2	2	+	6	5	1	10	15	29		+		1			4	2	8	
斜方輝石	54	41	56	45	38	43	86	65	55	56	42	49	51	69	56	56	60	68	35	42	38	32	26	31	37	75	124	
両輝石平行連晶																												
単斜輝石	11	18	9	8	6	4	18	14	8	4	8	16	19	39	40	42	30	57	13	18	8	9	4	4	11	20	43	
角閃石	12	6	4	10	6	4	6	9	9	6	9	3	7	7	14	8	7	10	4	9	6	9	4	5	7	4	9	
酸化角閃石	2	1	2	1	2		1				1	1		1	2	1	1	2	1	2	2	2		1			1	
緑簾石						1	+																					
ジルコン																											+	+
不透明鉱物	68	72	94	97	104	118	123	73	53	42	49	48	39	87	78	53	76	41	43	43	43	32	24	20	23	56	59	
雲母	1		1	2		1	3	2	2	7	5	3	2	3		1	2	1	2	4	8	9	4	1	4	4	3	
その他	187	270	300	265	309	276	407	166	179	189	257	166	190	200	221	261	264	266	168	118	165	127	110	86	115	143	126	
合計	513	589	609	565	615	600	764	539	519	511	578	501	510	542	519	526	542	558	541	523	546	571	563	554	522	550	601	

第2表 丘6東地点試料の計測粒数（+は計数以外の検出を示す）

地点	丘6																										
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	No. 21	No. 22	No. 23	No. 24	No. 25	No. 26	No. 27
試料番号																											
A 無色	12	6	2	21	8	6	10	5	7	11	8	9	11	17	22	39	44	154	132	28	5	5		1		3	1
A' 無色	11	20	29	22	21	19	21	19	25	26	19	26	25	45	68	72	133	264	307	81	24	10	20	11	12	15	11
A' 褐色								1	1													1					
B 無色	28	20	24	20	23	14	23	15	16	26	20	23	17	10	15	7	10	3	3	9	13	16	17	28	33	26	24
B 褐色																											
C 無色	11	24	15	24	25	24	29	20	35	14	20	20	31	21	19	20	18	23	29	19	17	23	27	16	49	17	11
C 褐色					1								1			1				1							
D 無色	3	4	1	2	2	2	3		2	1	3	1	1	5	8	4	7	39	30	6	6	3	1	2	2	2	1
E 無色	2	5	2	1			1											2	5	4	1						
F 無色	18	31	20	26	25	27	19	31	31	20	25	19	29	16	20	15	13	12	8	15	25	39	27	29	19	34	21
F 褐色			1		1					2	1			1		2	3			3	1				1	1	1
F 緑褐色	2		1																								
F' 無色	2			1			2			1	1	2		3	1	2	2		1			3	2	4	1	1	1
F' 褐色			3	2										1			1				5	3	1	2	2		1
F' 緑褐色	3	3																									
石英	17	18	21	18	16	20	20	13	9	7	19	10	4	7	4	8	7		1	12	8	6	9	14	26	16	28
長石	81	96	119	130	152	130	140	142	168	149	141	155	123	102	135	91	101	8	4	89	141	163	161	132	163	122	141
カンラン石				2	3	1	2	1	3	2	1		2		3	1			2	2	2	3		1		2	
斜方輝石	47	47	39	47	41	37	39	36	33	24	39	35	44	59	42	44	35	1	+	49	52	31	39	60	33	37	30
両輝石平行連晶																											
単斜輝石	16	12	5	9	9	4	5	6	4	4	7	11	10	12	11	13	13			17	15	24	13	11	10	9	17
角閃石	2	8	11	9	10	7	8	10	5	2	5	5	6	9	6	9	12			3	3	2	4	4	6	6	10
酸化角閃石	1		1		1													1				1					
緑簾石																	1										
ジルコン											1										1						
不透明鉱物	70	63	42	50	44	51	22	30	33	15	33	31	45	27	31	15	18		+	20	35	26	38	50	33	36	20
雲母	4	1	6	5	16	6	11	3	6	8	3	8	2	2	4	8	2			3	4	9	7	9	7	8	11
その他	245	180	223	138	222	187	215	367	290	226	253	237	291	185	205	169	126	16	11	163	168	204	217	173	195	240	215
合計	575	538	565	525	618	538	569	704	666	540	600	593	640	524	591	513	547	522	532	524	526	570	586	546	593	573	546



るため風化粒子が砂の抽出過程で分解されたと考えられる。

火山ガラス・軽・重鉱物組成では、最下部のNo. 7で火山ガラスが少なく重鉱物が多いが、他のNo. 6～1では火山ガラス量が20%台で重鉱物>火山ガラス=軽鉱物の変化に乏しい組成を示す。

形態別の火山ガラス含有率は、B・F型が連続して検出され、わずかながらA・A'・C型も連続的に検出される。どの形態の火山ガラスも含有率の変化はない。

重鉱物組成では、不透明鉱物>斜方輝石>単斜輝石=角閃石でカンラン石が微量検出される。不透明鉱物はNo. 6で約70%の最大値をとり上方に漸減する。これに対し斜方輝石はNo. 5の24%を最小に上方に緩やかに漸増する。

#### 第5遺跡B地点

粒径組成での砂含有率は、最下部のNo. 6で15%を示すが、上位のNo. 5～1では前後の低率で安定している。

火山ガラス・軽・重鉱物組成は、最下部のNo. 6で若干火山ガラスが少なく、No. 1で重鉱物がわずかに多いものの、No. 6～1では重鉱物=軽鉱物>火山ガラスの変化に乏しい組成を示す。火山ガラス量は20%台である。A・C地点に比較して重鉱物量が低い。

形態別の火山ガラス含有率は、A'・B・F型がやや多いが1%に満たない。その他A・C型などでも微量ながら連続的に検出される。どの形態も鉛直方向の含有率の変化は見られない。

重鉱物組成は斜方輝石=不透明鉱物>角閃石で、カンランが微量検出される。不透明鉱物は上方にわずかながら漸増傾向がある。

#### 第5遺跡C地点

粒径組成での砂含有率は、8～12%と低率で安定している。

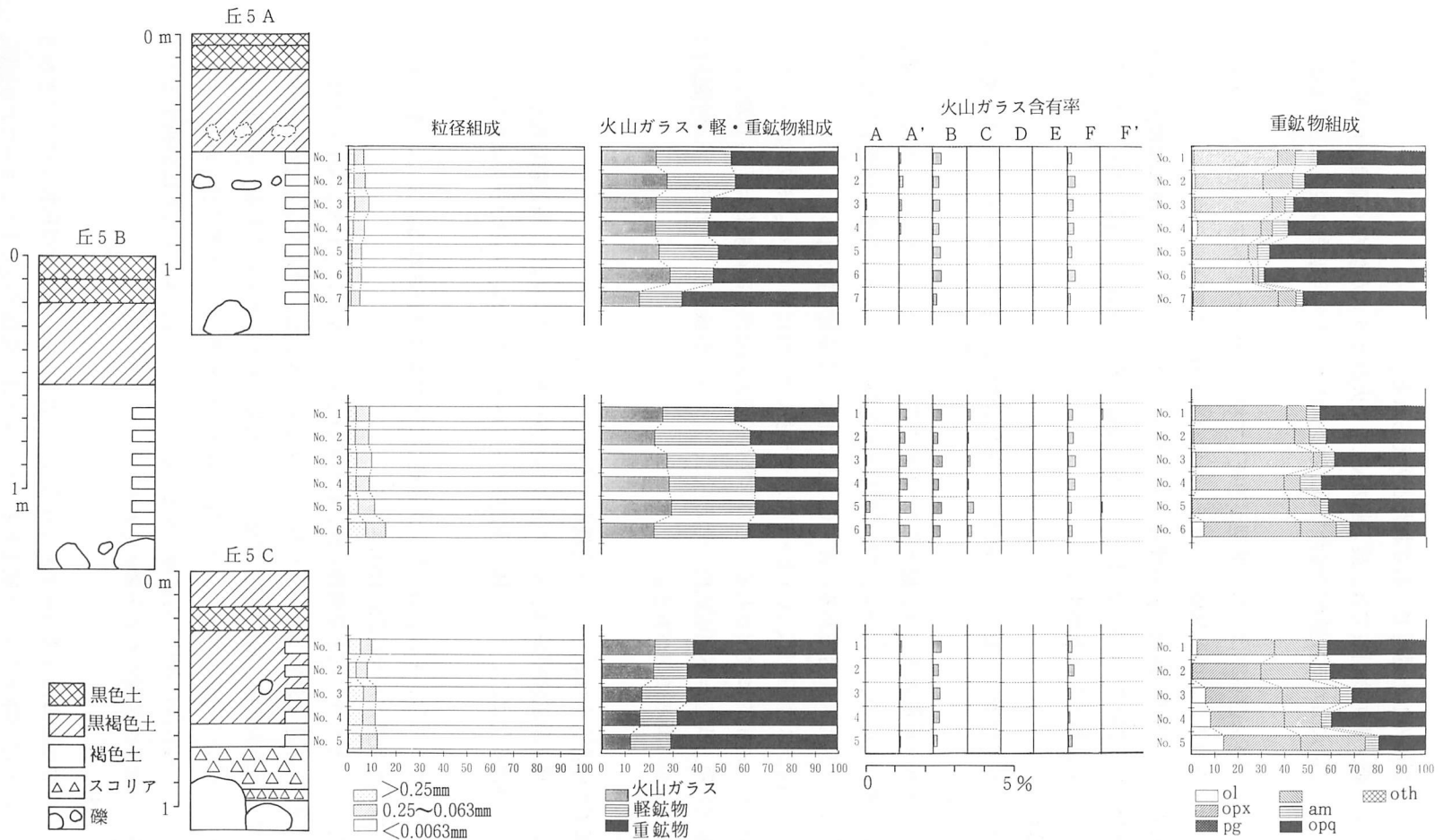
火山ガラス・軽・重鉱物組成は、火山ガラスが上方へ漸増するのに対し重鉱物は緩やかに漸減する。軽鉱物は変化に乏しい。全体に重鉱物が約60～70%を占め、火山ガラスは約10～20%と低率である。

形態別の火山ガラス含有率は、B・F型が連続してわずかに含有される。また、A・A'・C型なども極めて微量だが連続的に検出される。

重鉱物組成は、カンラン石と単斜輝石が比較的多いことで特徴づけられる。No. 5では斜方輝石>単斜輝石>不透明鉱物>カンラン石>角閃石の組成を示し、不透明鉱物は20%と少ない。No. 4～1では不透明鉱物≥斜方輝石>単斜輝石>角閃石・カンラン石である。不透明鉱物は上方へ緩やかな漸増傾向を示す。カンラン石・単斜輝石が他地点よりも多く含まれる。カンラン石は、No. 5で14%含有され上方に減少する。これらの特徴は、No. 5直下に分布するスコリアの二次堆積粒子の影響のためと考えられる。

#### スコリアの記載

スコリアは、念場原の段丘構成層である砂礫質の岩屑流あるいは泥流堆積物中に挟在される厚さ23cm、分級不良の降下スコリア層である。スコリアは、発砲不良でよくしまっており硬質、最大粒径20mm、表面は黄褐色であるが内部は褐色を呈する。肉眼で観察される斑晶鉱物は、



第41図 丘の公園第5遺跡試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成  
 olカンラン石 opx斜方輝石 pg両輝石平行連晶 cpx単斜輝石 am角閃石 opq不透明鉱物 othその他

第3表 火山ガラスの屈折率測定値

地点	試料	火山ガラスの特徴		屈折率(モード)	対比
		色調	形態		
丘6遺跡	No.3	cl	bw (A・A')	1.498~1.501 (1.499~1.500)	AT
丘6東	No.19	cl	bw (A・A')	1.498~1.501 (1.500)	AT
丘6東	No.9	cl	pm (C)	1.499~1.505(1.499~1.500, 1.502~1.503)	UG

cl 無色；bw バブルウォール型火山ガラス；pm 軽石型火山ガラス

カンラン石・単斜輝石・斜方輝石である。本テフラ層上部には約1mmの単柱状自形の単斜輝石が含まれる。スコリア粒子を粉碎して得られた斑晶粒子の重鉱物組成は上部で単斜輝石42%、カンラン石34%、斜方輝石13%、不透明鉱物11%、下部で単斜輝石34%斜方輝石25%、カンラン石24%、不透明鉱物16%である。この玄武岩質スコリアの特徴および層位などから本テフラは八ヶ岳噴出物と推定される。おそらく上部～最上部広瀬ローム層中のカンラン石と両輝石の含有で特徴づけられるスコリア質テフラ（八ヶ岳団体研究グループ、1988）に相当する可能性がある。

丘の公園第5遺跡C地点での分析結果において最下部のNo.5からA'・B・F型などの火山ガラスの混入が認められる。Pm-Iより下位層にまで達した斜面の削剥はおそらくかなり最近まで継続し、斜面の安定後土壌堆積が開始されたのは黒色土形成の直前であったと推定される。

#### 第6遺跡

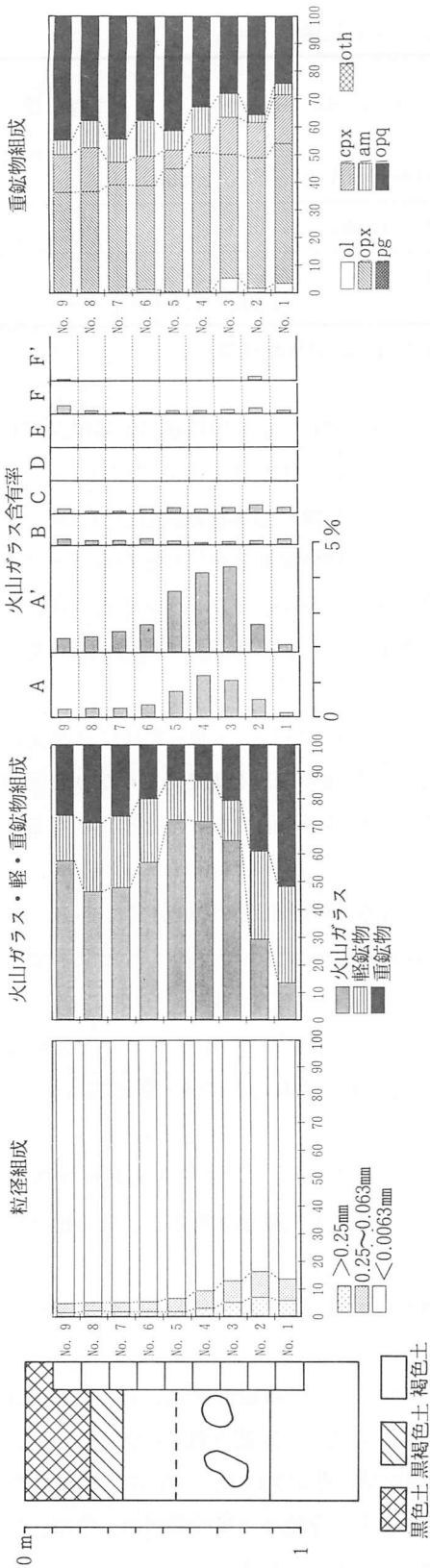
No.4以下では拳大から最大50cmの円礫が多く含有される。粒径組成での砂分含有率は、No.2において16%を最大に上方に漸減する。No.7～9の黒褐色～黒色土では約5%と低率である。

火山ガラス・軽・重鉱物組成では、No.1～3で火山ガラスが急増しNo.3～5で70%前後の極大となる。No.6～8と減少するがNo.9でやや増加する。これと逆に軽・重鉱物はNo.3～5において極小となる。

形態別の火山ガラス含有率は、A型がNo.4で約1%、A'型がNo.3で約2%のピークをなし、それぞれ、上方に漸減する。B・C・F型は少量ずつ連続して検出されるが、その他は極めて微量でまれに含まれる。

重鉱物組成は、斜方輝石・不透明鉱物が多く、単斜輝石・角閃石・酸化角閃石・カンラン石などわずかに伴う。

No.3に含有されるバブルウォール型（A・A'型）火山ガラスの屈折率は、1.498～1.501（主要レンジ1.499～1.500）である。火山ガラスの諸特性からATに同定される。A・A'型火山ガラスの含有率の変化からNo.3付近にATの降灰層準が推定される。AT以下の礫層のうち上部はルーズであり、下部はよくしまっている。おそらく念場原の構成礫層の上位に比較的新しい扇状地性礫層が堆積し、離水後にATが堆積したと考えられる。

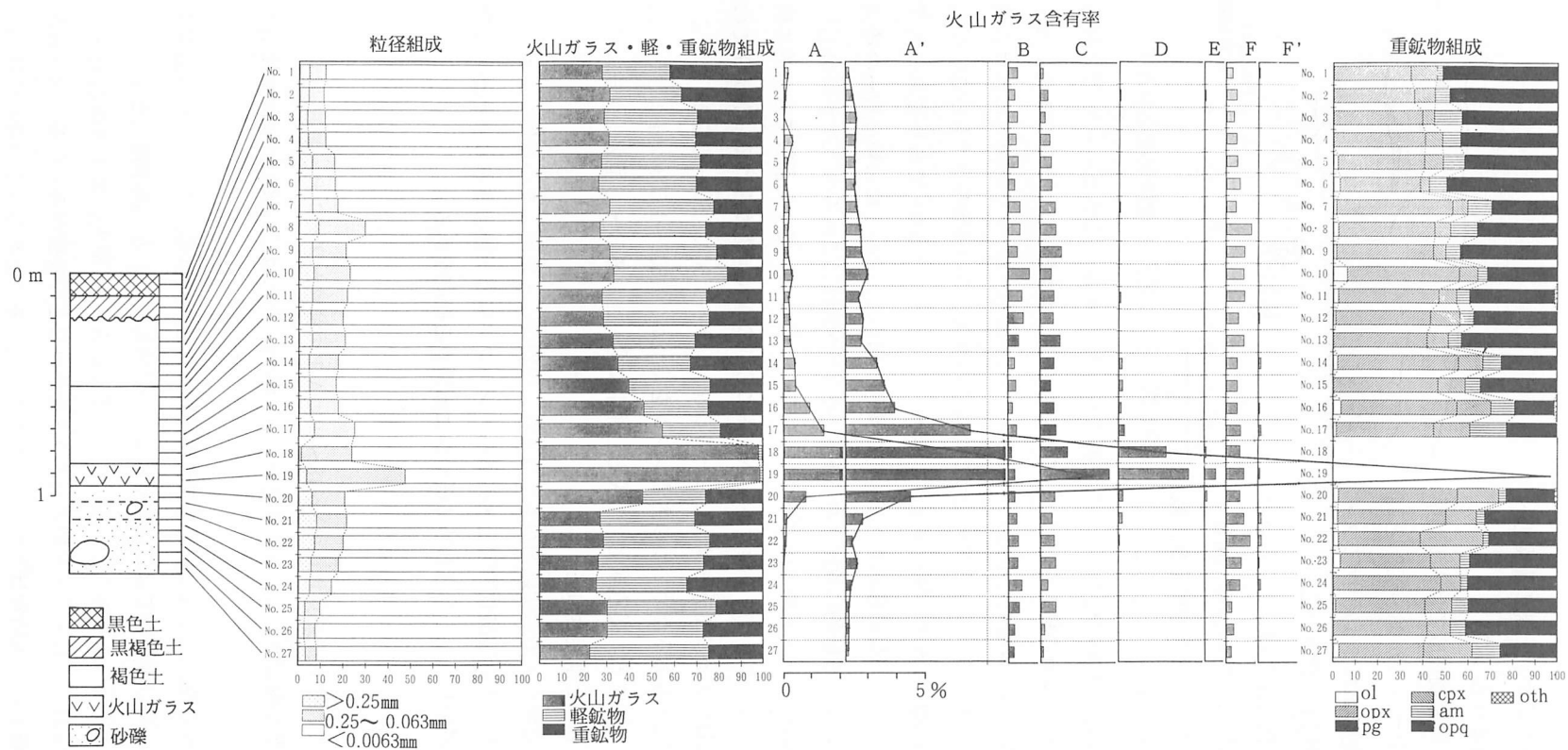


第42図 丘の公園第6遺跡試料の粒径組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成  
olカラン石 opx斜方輝石 pg両輝石平行連晶 cpx単斜輝石 am角閃石 opq不透明鉱物 othその他

### 第6遺跡東地点

本地点のATが砂質ローム層とその上の砂の薄層の上に約10cmの厚さで淡黄色を呈して堆積している(第4図)。堆積層内では上方細粒化が認められる。ATの下限は明瞭で細かい虫食い状の凹凸が認められる。さらに下方には太さ数~10数mm長さ数cmの砂管状にATの分布がまばらにみられる。また一部には、太さ約2cm長さ10cm以上の砂管状の底にATのブロックが落ち込んでいる。これらATの下方移動は堆積後の要因によるものである。相模野台や武蔵野台地におけるAT層準付近においてテフラが乱れている部分があり、北海道など寒冷地の2~3万年前の地層中のインボリューション(はげしい凍結・融解作用によって生じるとされる)との類似性から、南関東でも約2万年前頃は相当寒冷な気候にみまわれたと想定されている(町田、1977)。本地点の堆積状況もこれらと類似すること、および南関東地域よりも清里地域が標高が高いことから寒冷な気候的要因による可能性があるかもしれない。しかし凹凸の規模が南関東で示されたほど大きくないことから生物的な攪乱作用などの可能性も否定できない。

粒径組成ではATより下位の砂層部分で砂分が少ないという現象がみられる。風化が進行しているため砂の抽出過程で分解したと考えられる。ATのNo.19では $>1/4$ mmが4%で $1/4 \sim 1/16$ mmが44%と卓越する。その上位のNo.18は $>1/4$ mmで $1/4 \sim 1/16$ mmが22%と砂分が減少しATの上方細粒化現象が認められる。その上の褐色土では、約20%

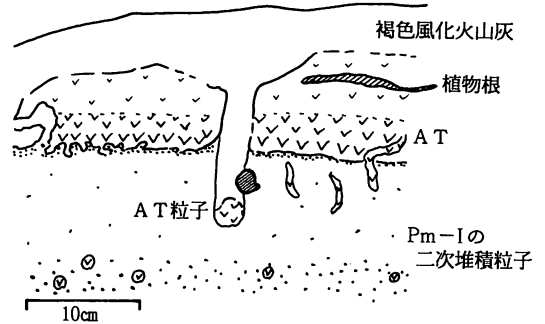


第43図 丘の公園第6遺跡東地点 試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成  
 olカンラン石 opx斜方輝石 pg両輝石平行連晶 cpx単斜輝石 am角閃石 opq不透明鉱物 othその他

前後の砂分が含有されるが、上部の黒褐色～黒色土では約10%あまりと少ない。

火山ガラス・軽・重鉱物組成ではA T層準(No.18-19)で火山ガラスが98～99%と高率で含まれる。その他の試料では火山ガラス・軽・重鉱物がほぼ等量ずつ含まれる。

形態別火山ガラス含有量では、No.19においてバブルウォール型のA型が11%、同じくA'型が25%の極大を示した上方に急激に減少していく。No.18におけるバブルウォール



第44図 丘の公園第6遺跡東地点のA T

型火山ガラスの減少は上方細粒化のあらわれであろう。またNo.18-19ではA・A'型に伴ってC・D型も2～3%の含有の極大を示すが、これらもA Tに属する火山ガラスである。A・A'型火山ガラスはA T層とは離れた上方・下方試料でも1%前後の低率で連続的に含有される。これは第14図に示されるようなA T火山ガラス粒子の降灰以降の移動を示すものであろう。なおNo.19に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.498～1.501(モード1.500)であり従来のA Tの測定値と一致する。A T下位の砂層やA T上位の褐色土層中にはPm-I様の粒径数mmの橙黄色軽石片が点在している。連続的に検出されるF型火山ガラスは、これらの二次堆積軽石片に由来する可能性が高い。B・C型火山ガラスは、A Tの上位において1%前後で連続的に検出される。不透明だがNo.10にB型の極大が、No.19にC型の極大が認められる。No.9でのC型を中心とする火山ガラスの屈折率は、1.499～1.505(1.499～1.500, 1.502～1.503)である。A Tの火山ガラスの混入もあるため2つの主要レンジを持つが、1.502～1.503の値はUG(山崎、1978)のものとは一致する。褐色風化火山灰層上部中に含有されるB・C型火山ガラスの一部はUGに由来するものと推定される。

重鉱物組成は、斜方輝石・不透明鉱物が多く含まれ、単斜輝石・角閃石を少量伴い、カンラン石が微量検出される。その他酸化角閃石・緑簾石・ジルコンなどが検出された。不透明鉱物は、A T付近でやや減少し、上方へきわめて緩やかに漸増する傾向がある。

#### 4. 考察

今回の分析において、第6遺跡東地点のNo.18～19にA Tの純層が認められ、第6遺跡のNo.3付近にA T降灰層準が検出された。また褐色風化火山灰層上部にはUG火山ガラスが検出された。

第5遺跡は、尾根部の西斜面でA T以降の風化堆積物と黒色土が堆積している。丘の公園第2遺跡におけるA T以降の堆積物では、重鉱物組成で不透明鉱物の上方へ漸増傾向を示し、火山ガラスの含有量がA T下位よりも上位の方がかなり多く、A・A'型火山ガラスの含有率はA Tをピークとして漸減し、B・C・F型火山ガラスを伴うなどの特徴がみられる。第5遺跡A・B・C地点で分析された堆積物はこれらの特徴をもっていることからA T以降の堆積物と

推定される。しかし本地点の堆積物がふつうの褐色風化火山灰層の岩質や鉱物組成とはやや異なるのは、侵食によって露出したPm-Iより下位の礫層やスコリア層を母材として形成された土壤中にテフラ粒子が混入したためと考えられる。

A Tの純層は、第6遺跡東地点および第1遺跡において露出している。前者では砂質層の上位に堆積し、後者では礫層を寝食した谷の斜面を覆っている。

念場原地域の侵食はA T降灰以前に存在し、谷や斜面が形成されたものと考えられる。第6遺跡東地点ではA T降灰直前に水に押し流されて堆積した砂層の上にA Tが堆積した。第6遺跡では、斜面上部から移動したと推定される礫を覆ってA Tが降灰している。また第1遺跡では谷壁斜面を埋積する堆積物の最下位にA Tが挟在する。第2遺跡とその周辺地点での分析結果では谷底低地の埋積はA T以降であることが明らかである。以上のようにこの地域での堆積はA T以降に再開されたことになるが、この時期は最寒冷期に相当し、山地における碎屑物の生産が活発化したことと関連しているものと考えられる。

(河西 学)

注1 河西学(1989)「丘の公園地域のテフラと地形」『丘の公園第2遺跡発掘調査報告書』  
山梨県教育委員会

注2 形態x型の火山ガラスの含有率Axは、

$$A_x (\%) = (C/B) \times (E_x/D) \times 100$$

で算出される。ただし、B：試料の乾燥重量(g)、C：1/4～1/16mm粒径砂分の重量(g)、D：計数した1/4～1/16mm粒径粒子の総数、Ex：計数したx型火山ガラスの粒数

#### 引用文献

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフクロロジーの基礎的研究—。第四紀研究, 11, 254—269.

遠藤邦彦・鈴木正章(1980)立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学, 13, 19—30.

町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良T<sub>n</sub>火山灰の発見とその意義—。科学, 46, 339—347.

町田洋(1977)火山灰は語る。324p., 蒼樹書房。

山崎晴雄(1978)立川断層とその第四紀後期の運動。第四紀研究, 16, 231—246.

八ヶ岳団体研究グループ(1988)八ヶ岳山麓の中部更新統。地団研専報, 34, 53—89.

# 版 图





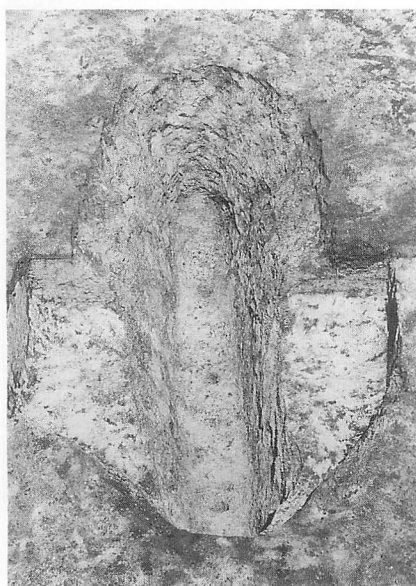
丘の公園第5遺跡A・B・C地区近景（北から）



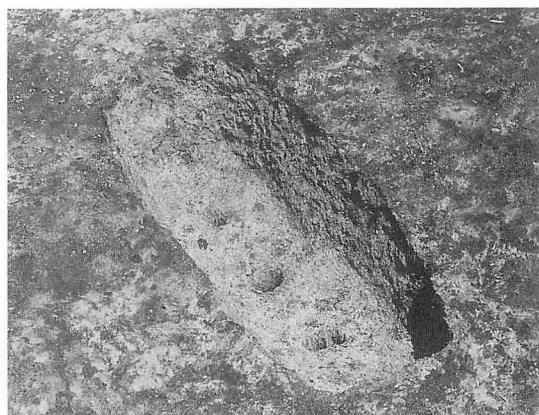
丘の公園第5遺跡A・C地区近景（南から）



A型5号陥し穴



A型8号陥し穴



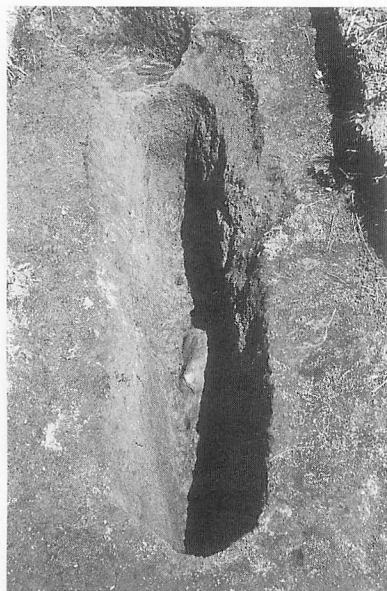
A型11号陥し穴



B型6号陥し穴



B型7号陥し穴



B型9号陥し穴



B型11号陥し穴



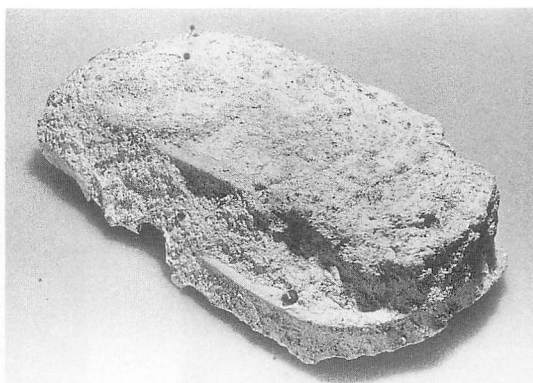
B型13号陥し穴



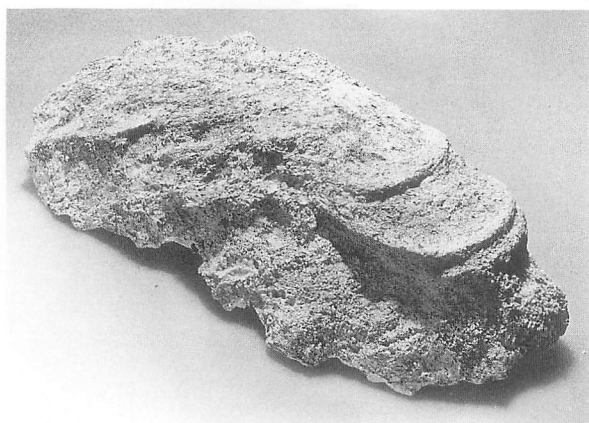
C 2号炭焼き遺構



B型7号陥し穴北側掘削工具痕



B型7号陥し穴北側掘削工具痕のモデリング陽像



B型11号陥し穴掘削工具痕のモデリング陽像



C地区縄文時代前期土器出土状況  
(西側斜面から)



A地区弥生時代後期土器出土状況  
(北側から)



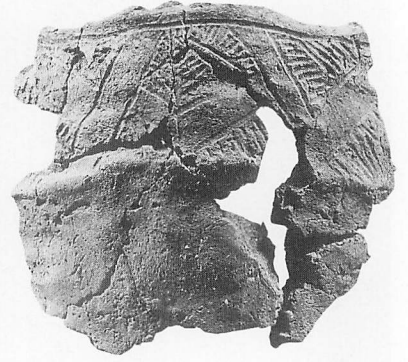
A地区縄文時代後期土器出土状況  
(西側から)



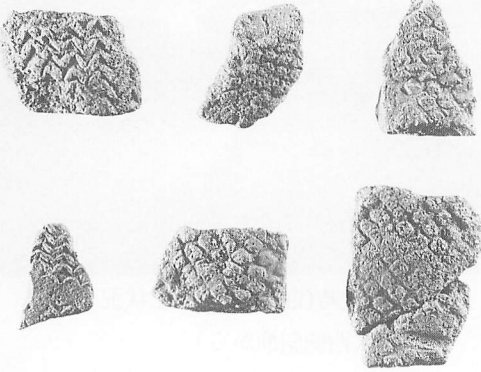
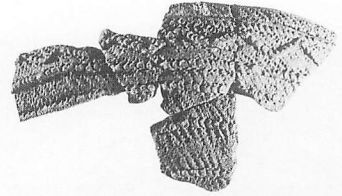
縄文時代草創期石槍出土状況



縄文時代草創期石槍



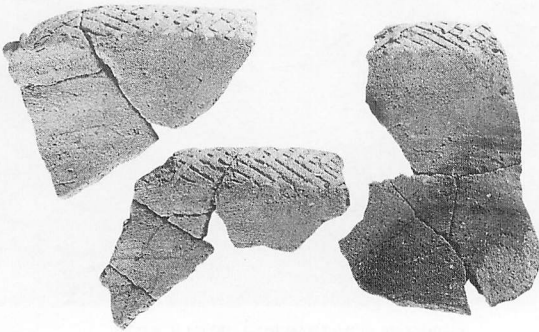
縄文時代早期鶴ヶ島台式土器



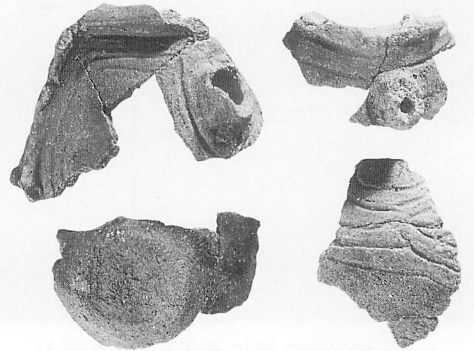
縄文時代早期押型文土器



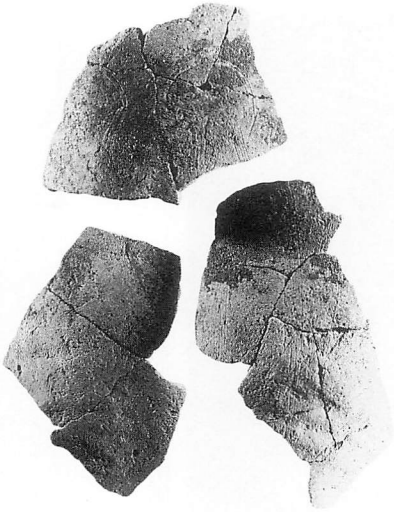
縄文時代前期十三菩提式土器



縄文時代前期鍋屋町系土器



縄文時代後期堀之内式注口土器



縄文時代後期堀之内式土器



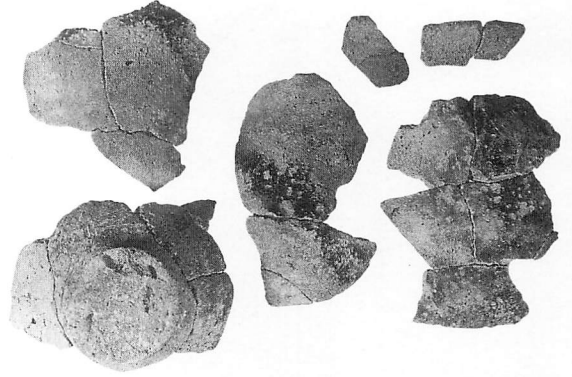
丘の公園第6遺跡出土槍先形尖頭器



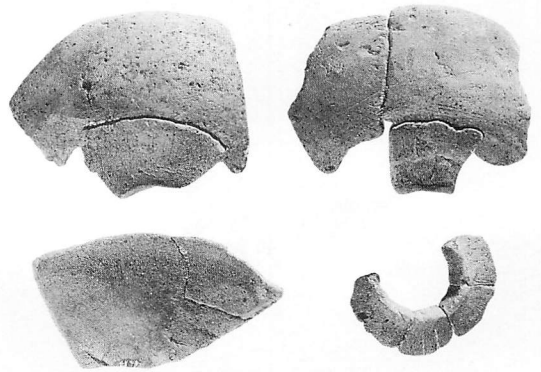
丘の公園第6遺跡試掘坑設定状況（北から）



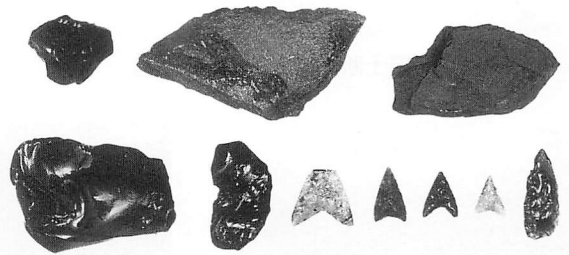
丘の公園第6遺跡西側断面



弥生時代後期壺形土器



古墳時代前期高環



縄文時代石器



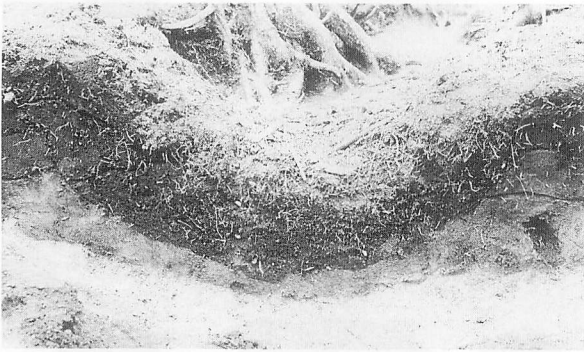
丘の公園第6遺跡遺物出土状況  
（土壌サンプルを採取した試掘坑）



溝南半部  
(北側から)



溝北半部  
(南側から)



溝覆土断面 (C-D線断面)



丘の公園第6遺跡土壌サンプル採取状況



丘の公園第5遺跡B地点  
土壌サンプル採取状況



丘の公園第5遺跡C地点  
土壌サンプル採取状況



丘6東地点A T純層調査坑



丘6東地点A T純層

## 丘の公園第5遺跡調査概要

フリガナ	オカノコウエンダイゴイセキハックツチョウサホウコクショ		
書名	丘の公園第5遺跡発掘調査報告書		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集		
主著者・従業者	保坂康夫・高野玄明		
発行者	山梨県教育委員会・山梨県企業局		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 0552-66-3016		
印刷所	山梨県甲府市丸の内1-10-1 (株)峡南堂印刷所		
印刷日・発行日	1990年3月20日 1990年3月31日		
フリガナ	所在地	山梨県北巨摩郡高根町清里	
オカノウエコウエンダイゴ 丘の公園第5遺跡	25000分の1地図名・位置・標高	谷戸	北緯35°54'11"東経138°36' 標高1205m
概    要	主な時代	縄文時代草創期・早期・前期末・後期前半、弥生時代後期、古墳時代前期、古代以降	
	主な遺構	縄文時代・古代以降陥し穴、古代以降炭焼き遺構	
	主な遺物	石器（石槍、石鏃、礫器など）、土器（押型文、鷓ガ島台、十三菩提、堀ノ内など）、鉄鏃など	
	特殊遺構 特殊遺物		
	調査期間	1988年5月16日～1988年9月21日	
フリガナ	所在地	山梨県北巨摩郡高根町清里	
オカノウエコウエンダイロク 丘の公園第6遺跡	25000分の1地図名・位置・標高	谷戸	北緯35°54'19"東経138°35'57" 標高1225m
概    要	主な時代	先土器時代末から縄文時代草創期	
	主な遺構		
	主な遺物	石器（槍先形尖頭器）	
	特殊遺構 特殊遺物		
	調査期間	1988年5月19日～1988年5月24日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集

丘の公園第5 遺跡発掘調査報告書

発行日 1990年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行所 山梨県教育委員会

山梨県企業局

印刷所 (株) 峽南堂印刷所



